

# 糸 繩 遺 跡

小笠郡土地開発公社用地  
取得に伴う調査

1988

静岡県小笠郡大東町教育委員会





糸緑遺跡航空写真





いとぐり  
**糸繰遺跡**

小笠郡土地開発公社用地  
取得に伴う調査

1988

静岡県小笠郡大東町教育委員会



## 序 文

糸縄遺跡は、大東町千浜に位置する遺跡で遺跡台帳には散布地として記載されていたところでありましたが、今回工場の隣接地であるため、開発公社による大東町工業宅地造成事業が行われるにあたり、記録保存を目的に調査を行いました。

遠州灘沿岸は砂丘で有名ですが、現在の砂丘は13列目のものだといわれております。その最後列にあたる砂丘が、今回調査区域となった糸縄遺跡を包蔵する昔の第1列目の砂丘であると考えられるところであります。

調査により縄文時代、弥生時代、及び中近世の各時代にわたる貴重な埋蔵文化財が発見されました。

今後の調査に待つところもありますが、町南部地域の砂地には遺跡は残されていないとの言い伝えはなくなりました。今後更に県内中西部での位置づけがなされてくるものと思います。

日本各地で開発に伴う埋蔵文化財の調査が行われております。本町におきましても同様、記録保存という形で調査が多くなってきております。

保存か、開発かという問題は古くして、新しい問題であります。本町にとって、バランスある発展こそ望まれる町の姿であります。文化遺産が正しく継承できるよう努力しているところでもあります。

おわりになりましたが、発掘調査、遺物整理、報告書作成にあたりまして御指導、御助言、御協力をいただきました加藤芳朗先生、静岡県教育委員会文化課の諸先生方、ならびに関係各位に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

昭和63年12月

大東町教育委員会教育長 青野行雄

## 例　言

1. 本書は、静岡県小笠郡大東町千浜字糸縄3360他に所在する糸縄遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ヘキスト・ジャパン株式会社の用地拡張に先立つもので、小笠郡土地開発公社の依頼をうけて実施されたものである。
3. 発掘調査主体者は大東町教育委員会であり、中山俊之（社会教育課）が担当した。
4. 調査期間は、昭和63年2月22日から6月15日まで実施された。
5. 出土品等の整理、本書の作成は、中山俊之が中心となって行った。
6. 発掘調査、出土品等の整理及び本書の作成にあたっては、次の諸氏に御教示を賜った。  
五島康司（静岡県教育委員会文化課）、足立順司（静岡県埋蔵文化財調査研究所）、松井一明（袋井市教育委員会）、渋谷昌彦、坂巻隆雄（島田市教育委員会）、久野正博（浜北市教育委員会）、渡辺康弘（早稲田大学）、喜多裕明（足立区伊興遺跡調査会）

（順序不同、敬称略）

7. 本遺跡の地学的立地環境について加藤芳朗（静岡大学名誉教授）氏に玉稿を頂いた。
8. 発掘調査参加者  
林弘之（國學院大學学生）、川島敏男、小笠原金太郎、飯田春一、富田ひで、松本まき（以上便利組合）、赤堀庄平、佐藤善衛、岩瀬末雄、増田秀一、相沢友治、井垣忠志、赤堀薰、増田長作、佐野一郎、富田毅一、中田初枝、宇田きぬ、岩倉さよ、
9. 出土品整理参加者  
林弘之、寺里和久、和田浩一郎（國學院大學学生）、佐々木裕乃、永田みどり

## 凡　例

1. 本書の遺構、遺物挿図の縮尺等の指示は各図版に示すとおりである。
2. 遺構実測図の水系レベルは海拔を示し、方位は真北を指示する。
3. 遺物の実測は原則として%以上残存しているものを対象とした。鉄軸、灰軸の範囲はスクリーン・トーンで示してある。

## 目 次

序 文

例 言

凡 例

第 1 章	調査に至る経緯	1
第 2 章	地理的・考古学的環境	1
第 3 章	調査の目的と方法	3
第 4 章	調査の経過	5
第 5 章	基本層序	6
第 6 章	検出遺構	7
	第 1 節 捃立柱建物址	7
	第 2 節 溝状遺構	15
	第 3 節 土坑	43
	第 4 節 ピット及びピット群	53
第 7 章	遺構外出土遺物	55
	第 1 節 繩文～古墳時代	55
	第 2 節 中世	57
	第 3 節 近世	59
第 8 章	まとめ	62
付 編	大東町糸繰遺跡の 地学的立地環境について	69

静岡大学名誉教授 加藤芳朗

## 挿 図 目 次

第1図 試掘調査グリッド配置図	2	第22図 SD022、024~030 (B-1~4区)	41
第2図 グリッド設定図	3	第23図 SK001~006	45
第3図 遺跡位置図	4	第24図 SK007及び遺物出土状況	47
第4図 基本層序概念図	6	第25図 SK008~011	48
第5図 SB001出土遺物	7	第26図 SK012~014	51
第6図 SB001	8	第27図 SK003、004、007出土遺物	52
第7図 SB002出土遺物	9	第28図 SK007出土遺物	53
第8図 SB002	10	第29図 C-11区ピット群	54
第9図 SB003	11	第30図 繩文~古墳時代出土遺物	56
第10図 SB004	12	第31図 遺構外出土遺物(1)	58
第11図 SB005	13	第32図 遺構外出土遺物(2)	60
第12図 SB006	14	第33図 遺構外出土遺物(3)	61
第13図 SD001~006、011	17	第34図 中世・近世遺構外 出土遺物量分布図	63
第14図 SD007	19	第35図 糸縄遺跡全測図	67
第15図 SD008、009 及びC-12区ピット群	23	第36図 大東町の地形・地質図	70
第16図 SD012	25	第37図 小笠町上平川付近から 下流の菊川平野の地下地質	72
第17図 SD010、013~015	27	第38図 累積頻度曲線とFriedmanの 領域図へのプロット	76
第18図 SD016~018	31	第39図 砂の堆積環境判定の検索試案	77
第19図 SD017、019~022	33		
第20図 SD出土遺物	37		
第21図 SD022~024 (C-1~3区)	39		

## 表 目 次

表 1 試料の一覧と粒径組成の特性	75
-------------------	----

## PLATES 目 次

P L 1	1 SB001	7 SD017,019,020
	2 SB002	8 SD017,019~022
	3 SB003	P L 4 1 SD017
	4 SB004	2 SD022,023,SK012
	5 SB005	3 SD023
	6 SB006	4 SD022,029,SK013,014
	7 SK001	5 SD030
	8 SK002	6 C-12区ピット群
P L 2	1 SK004	7 SB006,SD022
	2 SK005	8 SD022,023,SK012
	3 SK006	P L 5 1 SB005,006,SD024~028
	4 SK007	2 調査状況
	5 SK008 SD016,017	3 調査状況
	6 SK009,010	4 調査状況
	7 SK011	5 糸縄遺跡航空写真
	8 SK012	6 糸縄遺跡航空写真
P L 3	1 SK013,014	P L 6 SB・SD・SK出土遺物
	2 SD001~006,011	P L 7 SK007出土遺物(1)
	3 SD007	P L 8 SK007出土遺物(2)
	4 SD008,009	縄文~古墳時代出土遺物
	5 SD010,013~015	P L 9 遺構外出土遺物(1)
	6 SD012	P L 10 遺構外出土遺物(2)



## 第1章 調査に至る経緯

静岡県は茶の産地として知られているが、大東町もその例にもれず、茶の栽培が盛んに行われている。近年では、それ以外の産業にも力を入れるようになり、町の活性化に努めており、その結果の一つとして工場の誘致が挙げられる。そして、現在では多くの企業の工場が立ち並ぶこととなった。これらの工場のなかには、業務拡大のため工場用地を拡張しなければならない企業も少しずつ出てきており、ヘキスト・ジャパン株式会社もその中の一つである。

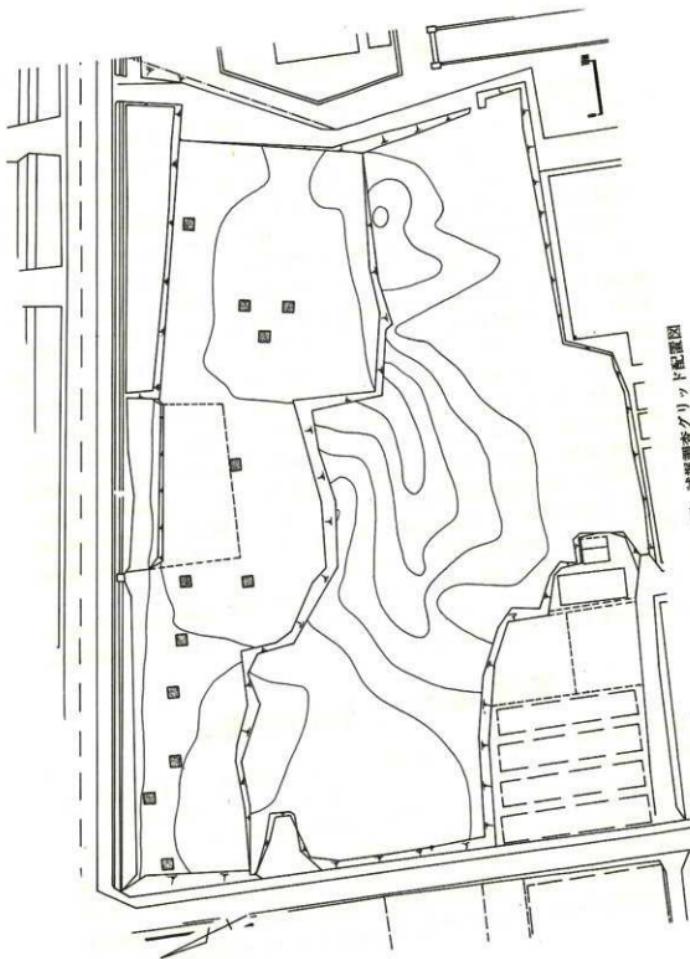
ヘキスト・ジャパン株式会社は、その隣接地一帯を工場用地として拡張することになった。しかし、拡張予定地の西北端には周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登録されている糸縄遺跡があるため、町教育委員会は糸縄遺跡の保護と環境保全を図るよう依頼したが、遺跡の存在する地域だけ工場用地からはずすことは、全体の計画上不可能との結論に至ったため、発掘調査を実施することになった。この結論をうけて遺跡の取り扱いについて県教育委員会文化課の指導により、本格調査を実施しなければならない範囲を明確にするため、昭和62年11月に試掘調査を実施した。北側の平坦部をA地区、南側の小高い丘をB地区とし、A地区に11カ所、B地区に2カ所、それぞれトレチまたはグリッドを設定して実施された（第1図）。B地区からは遺構、遺物とも検出されなかった。A地区的それぞれのグリッドからは山茶碗等の他、ビットが検出され、集落の存在が推定されるに至った。したがってA地区は、ほぼ全域を調査対象とした。しかし、松林のあった場所は激しい擾乱を受けていることが考えられたため、調査対象からは除外した。調査対象面積は、2745m<sup>2</sup>に及ぶ。

調査対象となった地域は個人の所有地であったが、それを小笠郡土地開発公社が一括買収して、その後ヘキスト・ジャパン株式会社へ売却するという形がとられる。今回の調査段階における土地所有者は、小笠郡土地開発公社である。

## 第2章 地理的・考古学的環境

静岡県の遠州灘沿岸、天龍川以東から御前崎まで、いわゆる南遠大砂丘が発達している。大東町にも千浜砂丘をはじめ、その例にもれず砂丘が発達している。沿岸には波の作用によって形成された砂堤列が存在するが、本町では浜野新田、大東町役場北側に認められるのみである。ほとんどの砂堤列は、その後の砂丘の形成により埋没しているものと考えられる。砂丘は天龍川の砂が、「遠州のからつ風」と呼ばれている強い西風によって運ばれて形成されたもので、糸縄遺跡のある本町東部では、砂堤列全体を覆うようである。また海岸に近い地域には斜砂丘と呼ばれている砂丘があるが、これは明治時代に人工的に造成されたものである。砂丘の北方は

第1図 試掘調査グリッド配置図



ラグーン跡平地となっているが、これは砂丘の形成により入江の出口が塞がれたことに起因していると考えられている。西方には菊川、北方には牛瀬川がそれぞれ流れているが、自然堤防はあまり発達していない。現在ラグーン跡平地では主に水田、砂丘ではイチゴ、メロン栽培が行われている。

糸縄遺跡（第3図）は、大東町千浜字糸縄3360他に所在し、このラグーン跡平地との境界付近、砂丘の最も北側に位置している。標高は約6～8mである。沿岸の砂丘からは、他に遺跡は浜野新田に1カ所確認されているのみであったが、糸縄遺跡の西方約1kmにある龍泉寺周辺の畠地からは、広範囲に中近世の陶磁器片が採集できることから、他にも砂丘には遺跡が存在する可能性は十分あるといえよう。

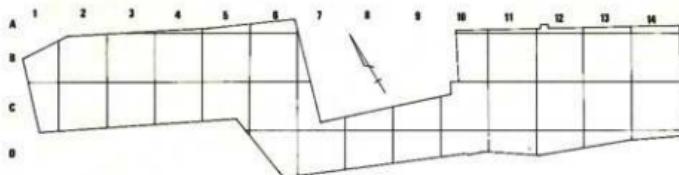
なお、本町及び遺跡周辺の詳細な地質・地形については附編（加藤芳朗氏「大東町糸縄遺跡の地学的立地環境について」）を参照されたい。

### 第3章 調査の目的と方法

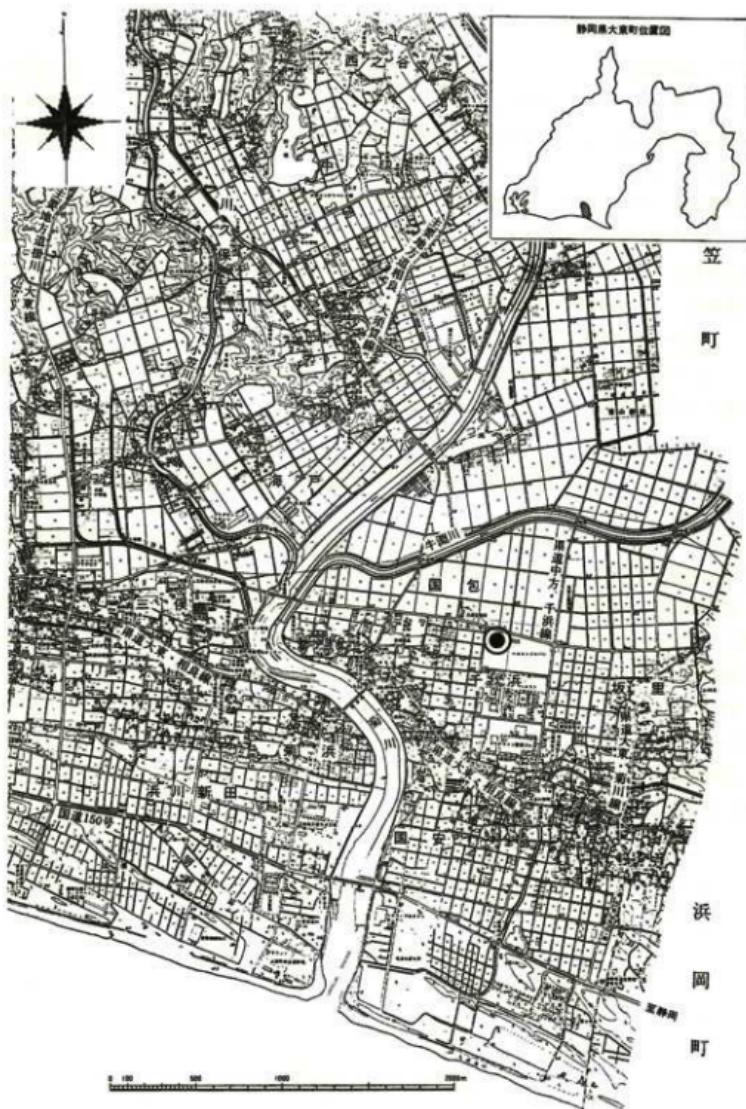
第1章で前述したように遺跡の取り扱いについての協議の結果、遺跡の保存が不可能であるため、記録保存することを目的として発掘調査を実施することになった。

試掘調査によって確定した調査対象区は遺跡範囲の北側の平坦部のほぼ全域であり、昭和63年2月22日から本格調査を実施することとした。調査方法は、まず表土層及び耕作土層を重機で掘削した後、包含層は手堀りで行い、遺構確認を行うことにした。尚、グリッドは、真北に一致させてではなく、調査区の方向と一致させることにした。調査区画は10m×10mとし、北から南へA～D、西から東へ1～14とし、例えば一つのグリッドをA-1区と呼称した（第2図）。

遺構実測図は1/20で作図することを原則とし、写真是6×7判、35mmのカメラを用いて、白黒、カラースライドフィルムを使用した。



第2図 グリッド設定図



第3図 遺跡位置図

## 第4章 調査の経過

調査期間は昭和63年2月22日から6月15日まで、延べ72日間に及んだ。期間中は例年より雨が多く、また地山が砂層であるため、速江特有の強い西風によって埋め戻され、何回も掘り直さなければならず、晴天の日でも西風が強ければ、調査は遅々として進まなかった。その対策として散水を行ったり、シートを敷きつめる等を試みたがさしたる効果はなく、調査は困難を極めた。以下、主だった経過を記す。尚、調査終了後に一般対象と千浜小学校6年生を対象とした現地説明会を計2回開催した。

2月22日、試掘調査の結果を踏まえ、重機による伐根及び表土層、耕作土層の掘削を開始する。27日、重機による掘削を終了する。29日、プレハブ、器材等を搬入。重機による掘削で表面が荒れているため、人力による整地を開始する。3月4日、整地がほぼ終了し、グリッド設定を行う。7日、便宜的にA～D-10区からA～D-14区までを第I区とし、A、B-14区から人力による掘り下げを開始する。4月1日、掘り下げと並行して、造構確認を行う。A～D-13、14区においては複数の溝状造構、C-12区を中心にピット、B-10区では土坑及び溝状造構を確認した。7日、第I区の掘り下げをほぼ終了し、造構の調査を開始する。11日、A～D-11～13区の造構確認を行う。12日、第I区の造構調査を継続しながら、A～D-6区からC、D-9区を第II区とし、掘り下げを開始する。14日、C、D-13、14区の実測を開始する。15日、C、D-13、14区の実測を終了し、C-11区において掘立柱建物址を確認する。18日、A、B-13、14区の実測を開始する。19日、C-12区を中心とするピット群の調査を行う。20日、A、B-13、14区の実測を終了し、C-12区の実測を行う。25日、第II区の掘り下げを終了し、造構確認を行い、掘立柱建物址、溝状造構を確認する。30日、C-12区の実測を終了し、A、B-12区の実測を開始する。5月2日、A、B-12区の実測を終了する。7日、D-10、11区の実測を開始する。B、C-1区からA～C-5区までを第III区とし、掘り下げを開始する。10日、D-10、11区の実測を終了する。C-11区の掘立柱建物址及びピット群を完掘し、実測にはいる。11日、A～D-13、14区の写真撮影を行う。C-11区の実測を終了する。14日、C、D-11、12区の写真撮影を行う。17日、A～C-10区の写真撮影を行い、実測にはいる。第II区の造構調査を開始する。19日、A～C-10区の実測を終了し、C、D-8、9区の実測を行う。23日、第III区の造構調査を開始する。C、D-7区の実測を行う。27日、A～C-5区の実測を開始する。30日、A～C-5区の実測を終了し、B、C-4区の実測を開始する。6月1日、第II区の写真撮影を行う。2日、B、C-4区の実測を終了し、B、C-3区の実測を行う。7日、第III区の確認面までの掘り下げを終了する。B、C-1、2区の実測を開始する。航空写真撮影のための清掃をA～D-14区から開始する。10日、B、C-1、2区の実測を終了する。11日、第III区の写真撮影を行う。13日、最終

的な清掃の後、航空写真を撮影する。15日、器材を撤収して、全ての現地作業を終了する。

## 第5章 基本層序

本遺跡は、本町南部の砂丘上に位置しており、調査前はおおむね茶畠であり、一部松林である。松林がある場所は、激しい擾乱を受けているようであるが、その他の大部分の保存状況は比較的良好である。全体的にはほぼ均等に堆積しているが、若干北側へ傾斜している。土質は全てにわたって砂質である。第4図は基本層序の概念図である。以下、基本層序を記す。

### 第I層 明褐色土層

小石、小砂利を若干含んでいる。しまりなく、粘性やや強い。畑地造成時の際の盛土であろうか。

### 第II層 明茶褐色土層

粒子がやや粗く、しまりなく、粘性やや強い。旧表土または耕作土と考えられる。

### 第III層 黒褐色土層

炭化物を若干含み、しまりややあり、粘性やや強い層である。この層からは桃山、江戸時代の遺物が出土している。

### 第IV層 黒色土層

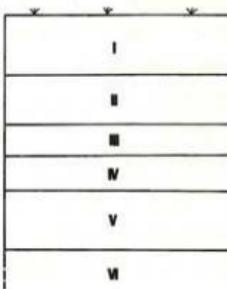
炭化物を含み、しまりややあり、粘性やや強い。この層からは、山茶碗、小皿等が出土していることから、鎌倉時代の包含層と考えられる。

### 第V層 黄褐色砂層

しまりややあり、粘性はない。この層の上位にくい込む形で縄文時代の土器片、石器が出土している。

### 第VI層 青灰色砂層

しまりあり、粘性はない。粒子は第V層の砂より粗く、層全体に水分を含んでいる。遺物の出土はない。



第4図 基本層序概念図

## 第6章 検出遺構

### 第1節 掘立柱建物址

#### S B001 (第6図)

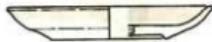
C-11区に所在し、S B002と隣接している。桁行長が南北に約5.6m、梁行長が東西に約2.8mの3間×2間で、柱穴は8個である。各柱穴間の距離は、桁方向東側(1～4)が約1.7m、約2.2m、約1.7m、同西側(6～9)は約2.2m、約1.8m、約1.9m、梁方向南側(1～9)が約1.3m、約1.6m、同北側(4～6)は約1.2m、約1.8mを測る。主軸の方位はN-20°-Eである。

柱穴は平面形が椭円形のものが多いが、5、10のように円形を呈するものもある。また1ヵ所にいくつもの柱穴が重複していることから、建て替え等が行われていたことが推定されるが、それぞれのプランがはっきりしないため、ここでは一応1棟として把握しておく。深さは確認面から約20～70cmであり、10のみが極端に浅い。

覆土は6層に細分される。1層は明褐色土層。砂質土を均質に含み、しまりややあり、粘性はない。2層は暗黄褐色土層。1層に標準土層第V層の砂が混入しており、しまりややあり、粘性はない。3層は暗褐色土層。砂質土を多量に含み、しまりあり、粘性はあまりない。4層は暗黄褐色土層。3層に標準土層第V層の砂が混入しており、しまりややあり、粘性はない。5層は暗茶褐色土層。茶褐色の砂質土を含み、しまりあり、粘性はあまりない。6層は、黄褐色土層。標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあり、粘性はあまりない。

出土した遺物は、摺鉢、皿等であるが、第5図に示したのは皿である。口径10.8cm、高台径6.2cm、器高1.8cmを測る。口縁部はわずかに外反して立ち上がりっている。高台は削り出し、口縁部には鉄軸が掛けられている。

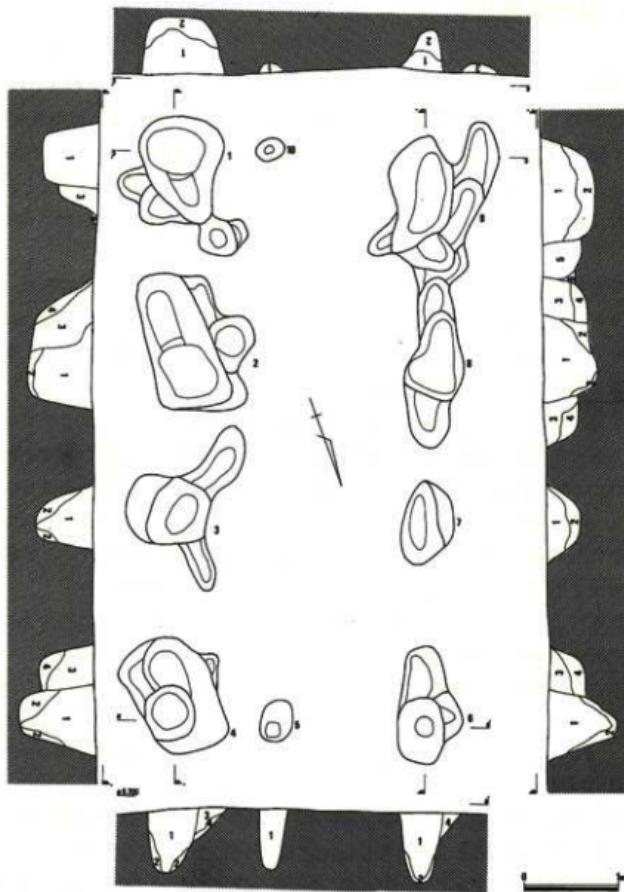
志戸呂産。



第5図 S B001出土遺物

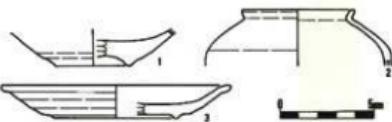
#### S B002 (第8図)

C・D-11・12区に所在し、S K005、SD010を切っている。桁行長が南北に約7.2m、梁行長が東西に約5.5mの2間×3間で柱穴は18個である。各柱穴間の距離は、桁方向東側第1列(1～3)が約3.6m、約3.6m、同第2列(4～11)は約3.8m、約3.5m、西側第1列(7～9)が約4.0m、約3.8m、同第2列(5～10)は約3.8m、約3.8m、梁方向南側(1～9)が約1.8m、約1.6m、約1.7m、同中央(2～8)が約2.1m、約2.1m、約2.1m、同北側(3～7)が約2.1m、約2.3m、約1.3mを測る。主軸の方向はN-65°-Wである。



第6図 SB001

柱穴の平面形は、円形ないし梢円形を呈している。深さは確認面から約20~60cmである。出土した遺物は天目茶碗、皿、茶入等である。図示し得たのは第7図に示した3点のみである。1は碗であろうか？高台径は3.8cmを測り、現存率は底部約1/2である。高台は削り出している。色調は赤褐色である。志戸呂産。2は茶入で口径5.8cm、現存率は口縁部約1/2である。色調は赤褐色、志戸呂産。3は皿で口径12.2cm、高台径6.4cm、器高2.0cmを測り、現存率は約1/5である。口縁部は外反して立ち上がり、高台は削り出している。内外面に白釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。



第7図 SB002出土遺物

#### SB003(第9図)

C・D-9区に所在し、SB004の東隣に位置する。柱穴が極めて多く重複しているため、プラン、建て替え等を把握するのは困難である。おそらく2間×2間のものが数棟重複していると考えられるが、ここでは一応1棟とみなす。桁行長が南北に約3.5m、梁方向が東西に約3.4m程度で柱穴は8個と考えられる。柱穴間の距離は、桁方向、梁方向とも約1.5mである。主軸の方向はN-25°-EからN-44°-E内であろう。

柱穴は、円形ないし梢円形を呈しており、深さは確認面から約15~60cmである。

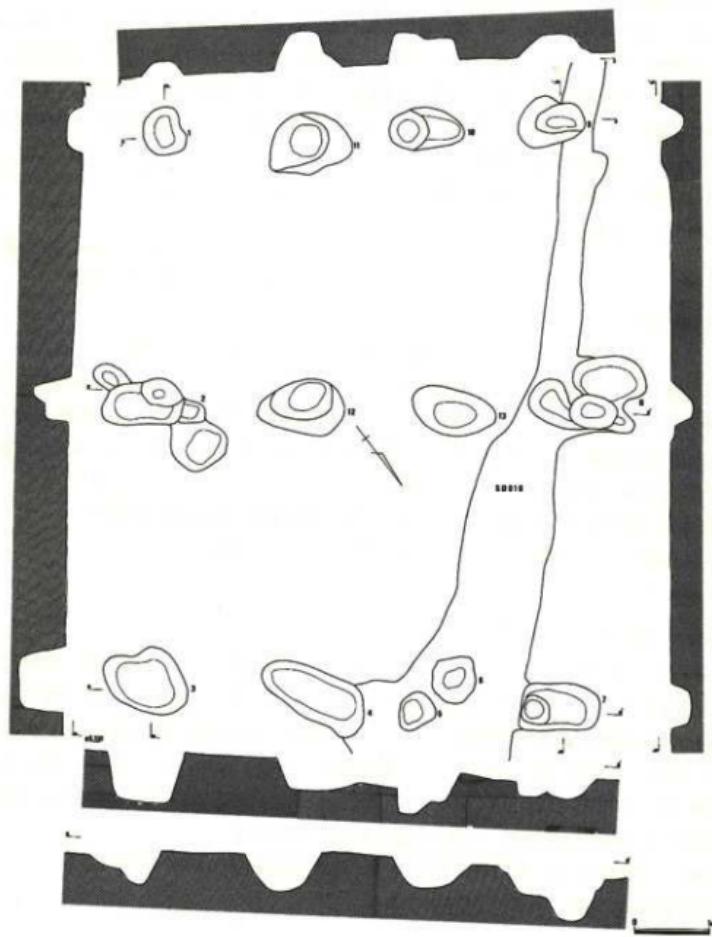
出土遺物は、天目茶碗、皿等の小片が多く図示し得るものはない。

#### SB004(第10図)

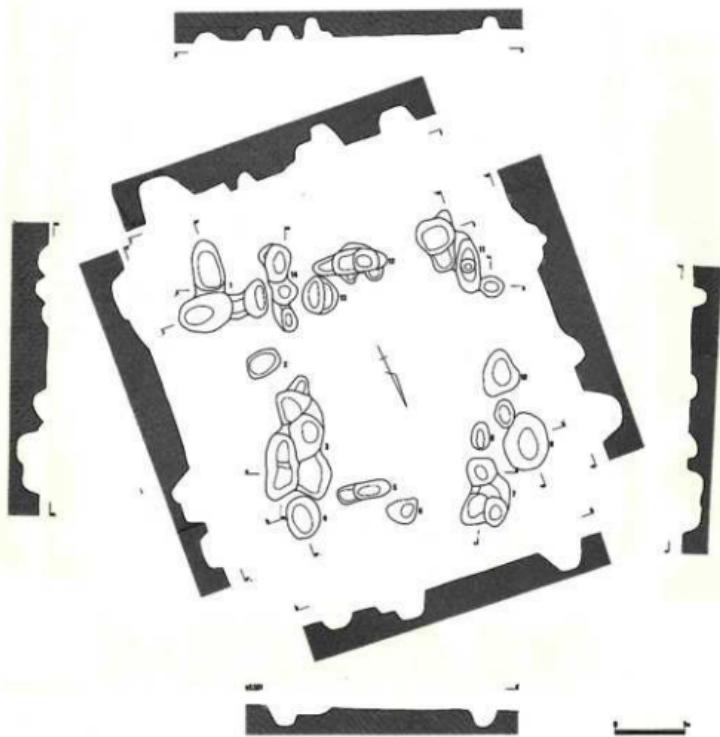
C・D-8区に所在し、SB003の西隣に位置する。本址は若干ずらして建て替え等が行われていると考えられ、桁行長が約5.8m、梁行長が約4.5mの3間×1間で、柱穴は8個である。各柱穴間の距離は、桁方向南側第1列(1~5)が約2.0m、約1.9m、約1.8m、同第2列(8~12)は約2.2m、約1.7m、約1.8m、同北側第1列(15~26)が約1.7m、約0.9m、約2.2m、同第2列(14~25)は約2.0m、約2.4m、約2.1m、梁方向東側(6~26)が約4.5m、同西側(1~15)は約4.6mを測る。主軸の方向はN-58°-Wである。

柱穴の平面形は、ほぼ梢円形を呈しており、深さは確認面から約20~70cmである。

出土遺物は、摺鉢、皿等の小片のみである。



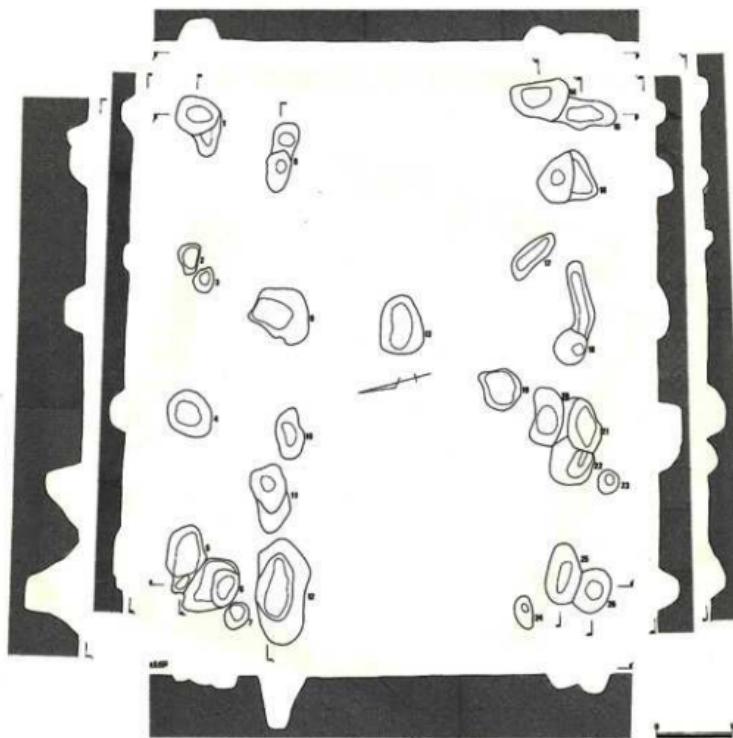
第8図 SB 002



第9図 S B003

**S B005 (第11図)**

B-3区に所在する。本址はS D026、S D027、S D030によって区画された中に位置している。しかし、本址と溝状造構の方向は必ずしも一致しておらず、S D027の西側が梁方向に一致しているのみである。桁行長は約7.4m、梁行長が約2.0mの4間×1間で柱穴は10個である。東側の張り出した部分は庇と考えられるが、不明確である。庇と考えられる部分を含めた桁行長は約9.7mである。各柱穴間の距離は、桁方向南側(1~6)が約2.0m、約1.8m、約1.8m、約1.6m、約2.4m、同北側(7~12)は約2.0m、約2.1m、約1.3m、約2.2m、約0.7m、梁方



第10図 S B 004

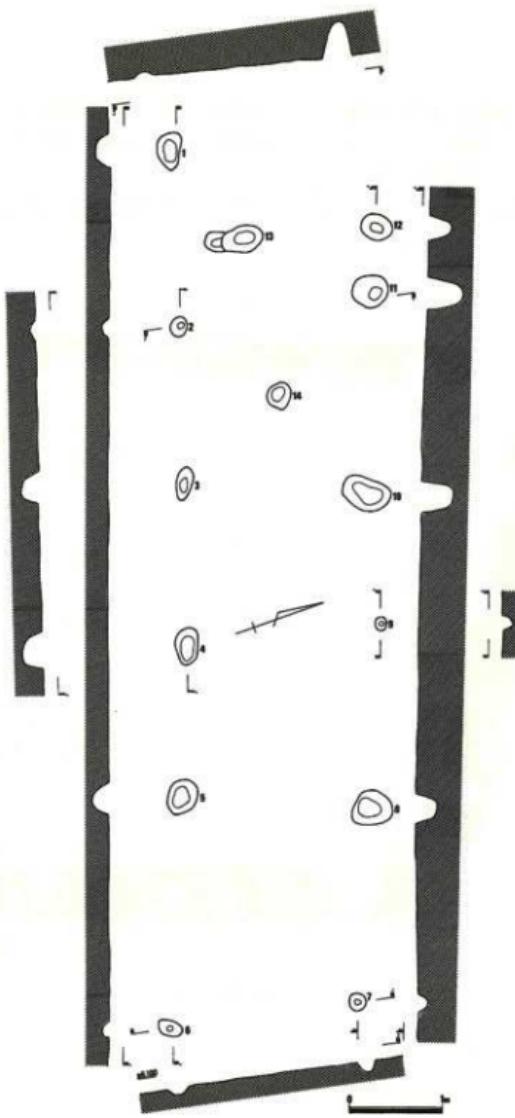
向東側が約2.0m、同西側が約2.2mを測る。主軸の方向はN-75°-Wである。

柱穴の平面形は、ほぼ円形を呈するものが多く、深さは確認面から約10~40cmである。

出土遺物はない。

#### S B 006 (第12図)

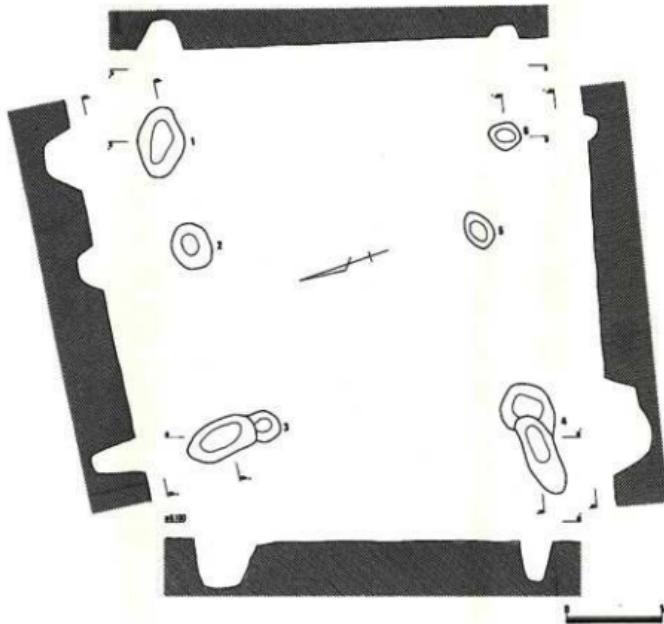
B-2・3区に所在する。本址はS D022、S D027、S D028、S D030によって区画された中に位置している。S D027を隔ててS B005と隣接している。S B005と同様に本址も溝状造構の方向は全て一致しているわけではなく、S D027が一致しているのみである。桁行長は約3.4m、梁行長が約3.3mの2間×1間で柱穴は6個である。2と5の柱穴が若干内側に入り込んでい



第11図 S B005

る。各柱穴間の距離は、桁方向北側（1～3）が約1.3m、約2.1m、同南側（4～6）は約1.9m、約1.0m、梁方向東側（1～6）が約3.2m、同西側（3～4）が約3.4mを測る。主軸の方向は一定しないが、ほぼN-70°-Wである。

柱穴の平面形は、円形ないし梢円形を呈しており、深さは確認面から約20～50cmである。  
出土遺物はない。



第12図 S B006

## 第2節 溝状遺構

### S D 001 (第13図)

B・C-14区に所在する。ほぼ南北方向に延びているが、南方向へは途中で東へ屈曲し、調査区域外へ延びている。残存長約10.6m、幅約50cm、深さは最深部で19cmを測り、最浅部との比高差は10cmである。断面形は、皿状を呈している。溝底は平坦である。

覆土は、單一層で明褐色土層。しまりはややあるが、粘性はない。

遺物(第20図)は、天目茶碗、山茶碗、かわらけが出土しているが、実測し得たものは2点のみである。1は天目茶碗の底部片で、残存率は約1/3である。高台径3.8cm。色調は黄白色で高台は削り出しており、内面には鉄軸が掛けられている。瀬戸・美濃産。2は山茶碗の底部片で、残存率は約1/2である。高台径6.8cm。色調は明灰色、高台は低く、粗粒痕が残っている。湖西産。

### S D 002 (第13図)

A～C-14区に所在する。S D 001にほぼ並行し、南北方向に延びており、わずかに蛇行している。南側は南西へ向かって途中で立ち上がっており。北側は北西へ向かっているようであるが、S D 003, 004に切られている。残存長約14m、幅約70cm、深さは最深部で18cmを測り、最浅部との比高差は12cmである。断面形は、皿状を呈している。溝底は平坦である。

覆土は、單一層で明褐色土層。しまりはややあるが、粘性はない。

遺物(第20図)は、山茶碗、かわらけが出土しているが、実測し得たものは1点のみである。3は山茶碗の底部片で、残存率は約1/5である。高台径5.6cm。色調は淡灰色、断面三角形の高台が付けられている。底部内面には重ね焼きの痕跡をわずかに残しており、その外側には自然釉がみられる。湖西産。

### S D 003 004 (第13図)

A～D-14区に所在する。S D 004はS D 003を切っており、また他の重複している遺構の中でも最も新しいものと考えられる。S D 003とS D 004は位置関係からみて、造り替えとみることも可能であろう。南東～北東方向に弧状を呈して走っており、それぞれ両端は調査区域外へ延びている。残存長約23.9m、幅約1～1.4m、深さは最深部で56cmを測り、最浅部との比高差は8cmを測る。断面形は、鍋底状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は、6層に細分され、1～4層がS D 004、5、6層がS D 003の覆土である。1層は明褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。3層

は黒褐色土層、しまりあり、粘性やや強い。4層は黄褐色土層、標準土層第V層の砂を含む。しまりあまりなく、粘性弱い。5層は黒色土層、しまりあり、粘性やや強い。6層は黄褐色土層で標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあり、粘性弱い。

遺物（第20図）は、山茶碗、かわらけの他、砥石が出土したが、小片のものが多く、実測し得たものは図示した4点にとどまる。4は山茶碗の底部片で、残存率は約1/4である。高台径6.8cm。色調は暗灰色、断面三角形の高台が付けられている。底部内面には若干自然軸がみられる。湖西産。5も山茶碗の底部片で、残存率は約2/3である。高台径6.6cm。色調は明灰色、高台は低く、粗雑である。湖西産。6は小皿の底部片で、残存率は底部全周である。底径4cm。色調は茶灰色で、焼成不良による器面の荒れが著しい。湖西産。7は砥石であり、一部下半を欠損している。表裏及び片側面の3面が砥面であり、1面には擦痕がみられる。

#### S D 005 (第13図)

B・C-14区に所在する。S D 004に切られており、ほぼ南北方向に直線的に延びており、北側は途中で立ち上がっていている。残存長約11.2m、幅約70cm、深さは最深部で44cmを測り、最浅部との比高差は33cmを測る。断面形は、鍋底状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は、2層に細分され、1層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は黄褐色土層、標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあり、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S D 006 (第13図)

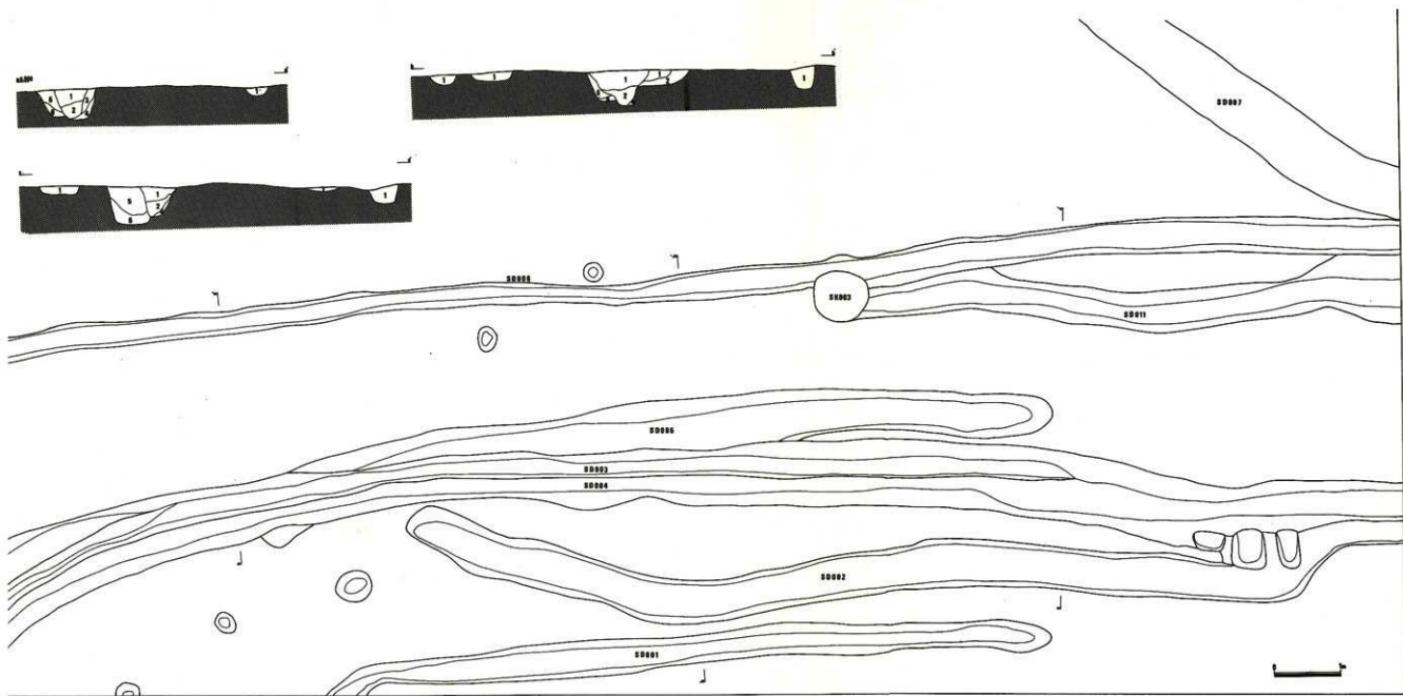
A～D-14区に所在する。南北方向には直線的に走っており、S D 011を切っている。また一部S K 003に切られている。両端はそれぞれ調査区域外へ延びている。残存長約23.6m、幅約30～50cm、深さは最深部で38cmを測り、最浅部との比高差は20cmである。断面形は、鍋底状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は、單一層で明褐色土層。しまりはややあるが、粘性はない。

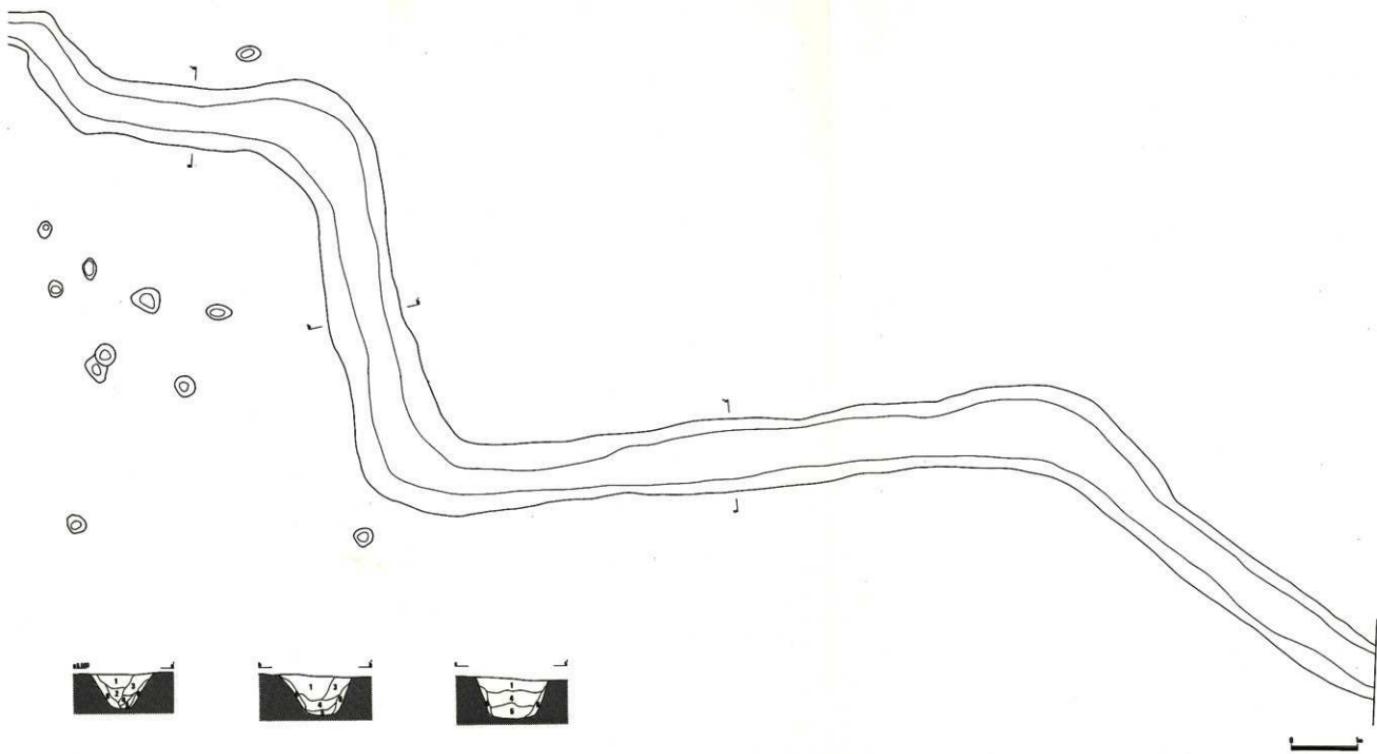
遺物（第20図）は、山茶碗、かわらけ等が出土しているが、実測し得たのは、山茶碗1点のみである。8は山茶碗の底部片で、残存率は約1/4である。高台径6.8cm。色調は淡灰色、高台は断面が低い三角形で、底部内面にはわずかに重ね焼きの痕跡がみられる。湖西産。

#### S D 007 (第14図)

C・D-13区からA～C-14区に所在する。北東～南西方向にクランク状に屈曲しながら延びていて、南西方向へは途中で立ち上がっており、北東方向へは調査区域外へ延びている。残存



第13図 S D001～S D006-011



第14図 S D007

長約28.5m、幅約1m、深さは最深部で60cmを測り、最浅部との比高差は50cmである。断面形は鍋底状を呈し、溝底は平坦である。

覆土は、6層に細分される。1層は明褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層も明褐色土層で、若干砂を含む。しまりややあり、粘性弱い。3層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。4層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は黄褐色土層で標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあまりなく、粘性弱い。

遺物は、山茶碗、小皿、かわらけが出土しているが、小片が多く、図示し得るものはない。

#### SD008 (第15図)

A～C-12区、C・D-13区に所在する。南一北東方向にわずか弧状を呈して走っており、北東方向へは、調査区域外へ延びている。南方向は途中で立ち上がっている。残存長約22.2m、幅30～70cm、深さは最深部で22cmを測り、最浅部との比高差は17cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は單一層で、明褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物（第20図）は図示した山茶碗1点（9）のみである。これは底部片であり、残存率は約1/4である。高台径6.2cm。色調は明灰色、高台には粗粒痕がみられる。湖西産。

#### SD009 (第15図)

B・C-12区に所在し、SD008とはば並行して南北方向に直線的に走っている。両端はそれ立ち上がっており、残存長約13.2m、幅30～70cm、深さは最深部で11cmを測り、最浅部との比高差は3cmである。断面形はほぼ皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は單一層で、明褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物は山茶碗の小片のみである。

#### SD010 (第17図)

A～D-10区に所在し、SB002、SK005に切られている。B・C-10区の境界付近で若干弧状を呈している他は、ほぼ南北方向に走っている。南方向はSD012と接しており、北方向は調査区域外へ延びている。残存長約24.5m、幅40～120cm、深さは最深部で20cmを測り、最浅部との比高差は12cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は、2層に細分され、1層は暗褐色土層で、しまりなく、粘性弱い。2層は明褐色土層で、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物（第20図）は、山茶碗、かわらけ、土鍋が出土している。10は山茶碗の底部片で、残存率は約1/3である。高台径7.0cm。色調は淡灰色、断面三角形の高台が付けられ、底部内面には煤が付着している。湖西産。11の山茶碗底部は残存率約1/3、高台径5.6cm。色調は暗灰色、高台は八の字状に開いて付けられている。底部内面には重ね焼きの痕跡がみられ、その外側には自然釉が残っている。湖西産。12の山茶碗底部は残存率約1/4、高台径5.8cm。色調は淡灰色である。高台は低い粗雑な断面三角形のものが付けられている。湖西産。

#### S D011（第13図）

A・B-14区に所在し、ほぼ南北方向に走り、南方向をSK003に切られている。B-14区北側で東方向に弧状を呈し、北方向は調査区域外へ延びている。残存長約8.6m、幅50~65cm、深さは最深部で30cmを測り、最浅部との比高差は22cmである。断面形は、碗状を呈しており、平坦部はほとんどない。

覆土は単一層で、明褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。  
遺物は山茶碗の小片が1点出土したのみである。

#### S D012（第16図）

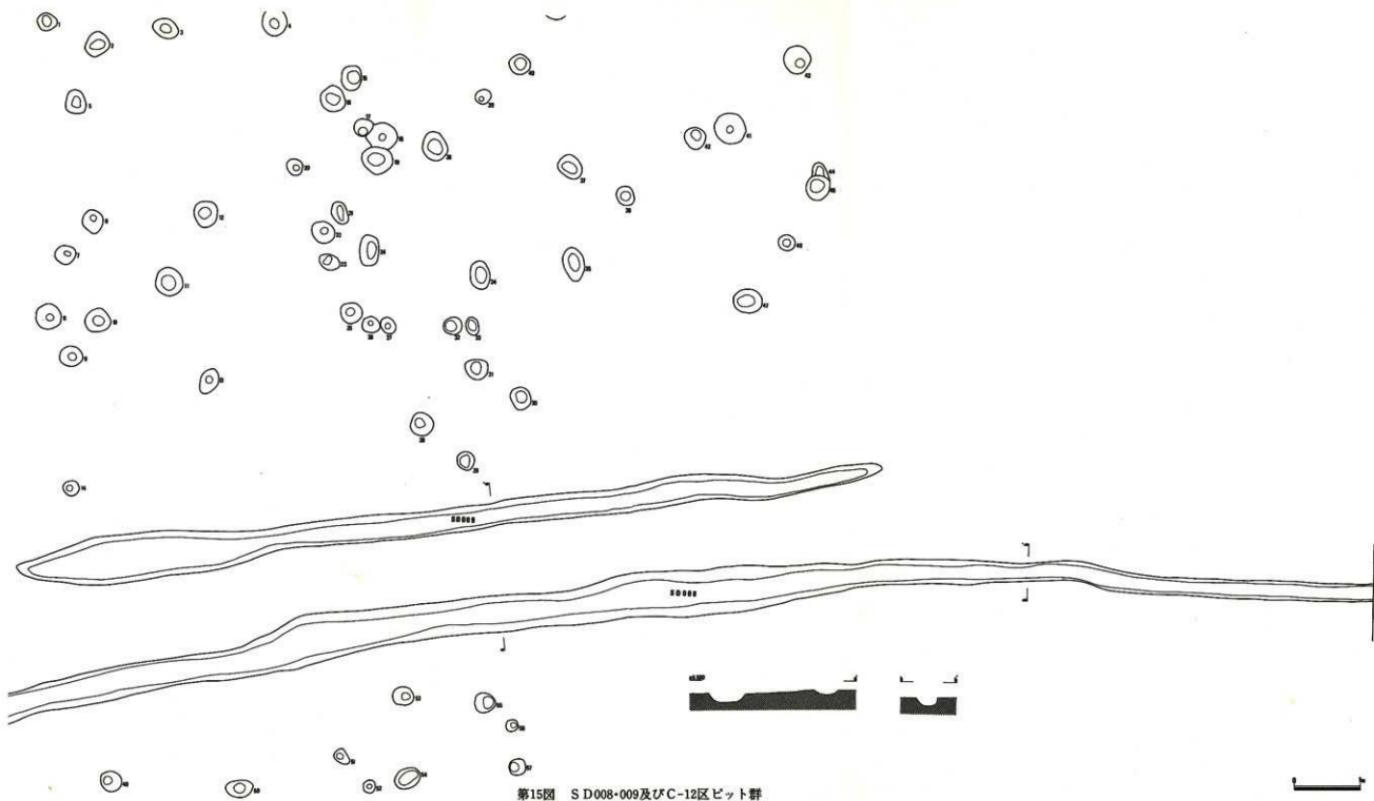
D-11・12区に所在する。北西一南東方向に走っており、北西方向は途中で立ち上がっており、南東方向はほぼ90°に南西方向に屈曲し、調査区域外へ延びている。一部SD010と接している。南側の壁面は崩落しているものと考えられ、1本の溝状遺構として把握しておく。残存長約12.8m、幅45~75cm、深さは最深部で30cmを測り、最浅部との比高差は16cmである。断面形は鍋底状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は、崩落した部分を含め4層に細分される。1層は暗茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層も明褐色土層で、しまりややあり、粘性やや強い。3層は明茶褐色土層、しまりあり、粘性やや強い。4層は黄褐色土層、標準土層第V層の砂を多量に含み、しまりなく、粘性弱い。

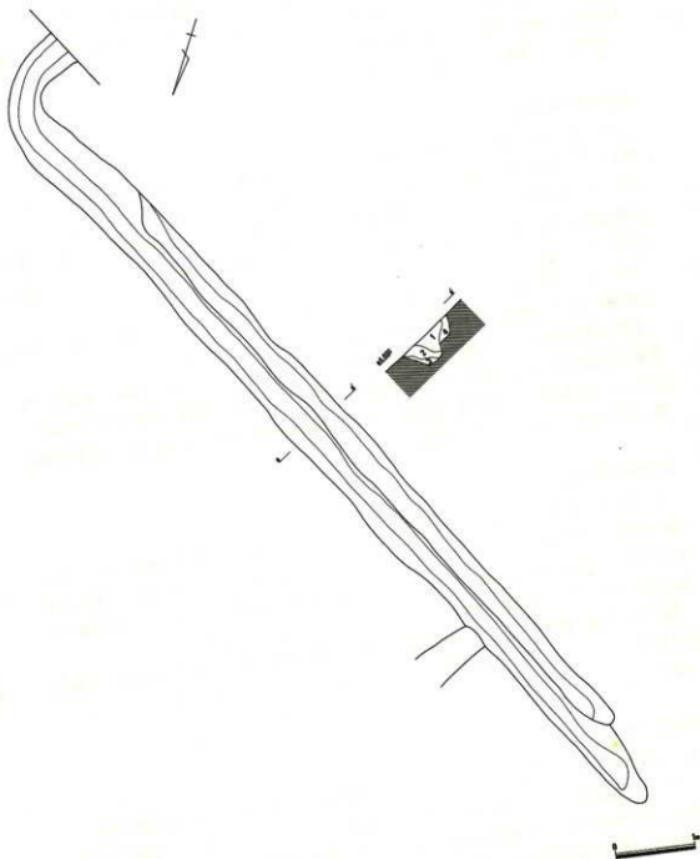
遺物（第20図）は、摺鉢、皿、茶入？が出土しているが、図示し得たものは茶入？（13）の底部片のみである。残存率は約1/2、底径5.4cm、色調は赤茶褐色である。志戸呂産。

#### S D013（第17図）

A~D-10区に所在し、隣接するSD014、SK001に切られている。残存状況からみて、ほぼ南北方向に若干の弧を描いて走っていると考えられる。北方向へは調査区域外へ延び、南方向へは途中で立ち上がっている。残存長約21.1m、幅約50cm、深さは最深部で26cmを測り、最浅



第15図 S D008-009及びC-12区ピット群



第16図 SD012

部との比高差は15cmである。断面形は鍋底状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は、2層に細分される。1層は暗褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は明茶褐色土層で、標準土層第V層の砂を少量含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物は、山茶碗、かわらけの小片が出土している。

#### SD014 (第17図)

A～D-10区に所在し、SD013を切り、SK001に切られている。ほぼ南北方向にSD013と並走しており、北方向は調査区域外へ延びている。南方向は途中で立ち上がっている。C-10区とD-10区の境界付近から南方へ若干屈曲している。残存長約21.9m、幅約30～130cm、深さは最深部で21cmを測り、最浅部との比高差は14cmである。断面形は鍋底状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は、2層に細分される。1層は暗茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は明褐色土層で、標準土層第V層の砂を少量含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物（第20図）は、山茶碗の他、かわらけの小片が出土している。14は山茶碗の底部で、残存率は底部全周である。高台径8.6cm。色調は明灰色、高台は低く、断面三角形のものが付けられている。湖西産。15も山茶碗の底部で、残存率は底部全周である。高台径6.6cm。色調は明灰色、高台は低く、粗雑である。湖西産。

#### SD015 (第17図)

C・D-9・10区に所在する。ほぼ南北方向に走っており、北方向は調査区域外へ延び、南方向は途中で立ち上がっている。全容は定かではないが、SD013、014とおおむね同じ様相を呈すると考えられる。残存長約8.1m、幅約40～140cm、深さは最深部で45cmを測り、最浅部との比高差は39cmである。断面形は碗状を呈しており、平坦部はほとんどない。

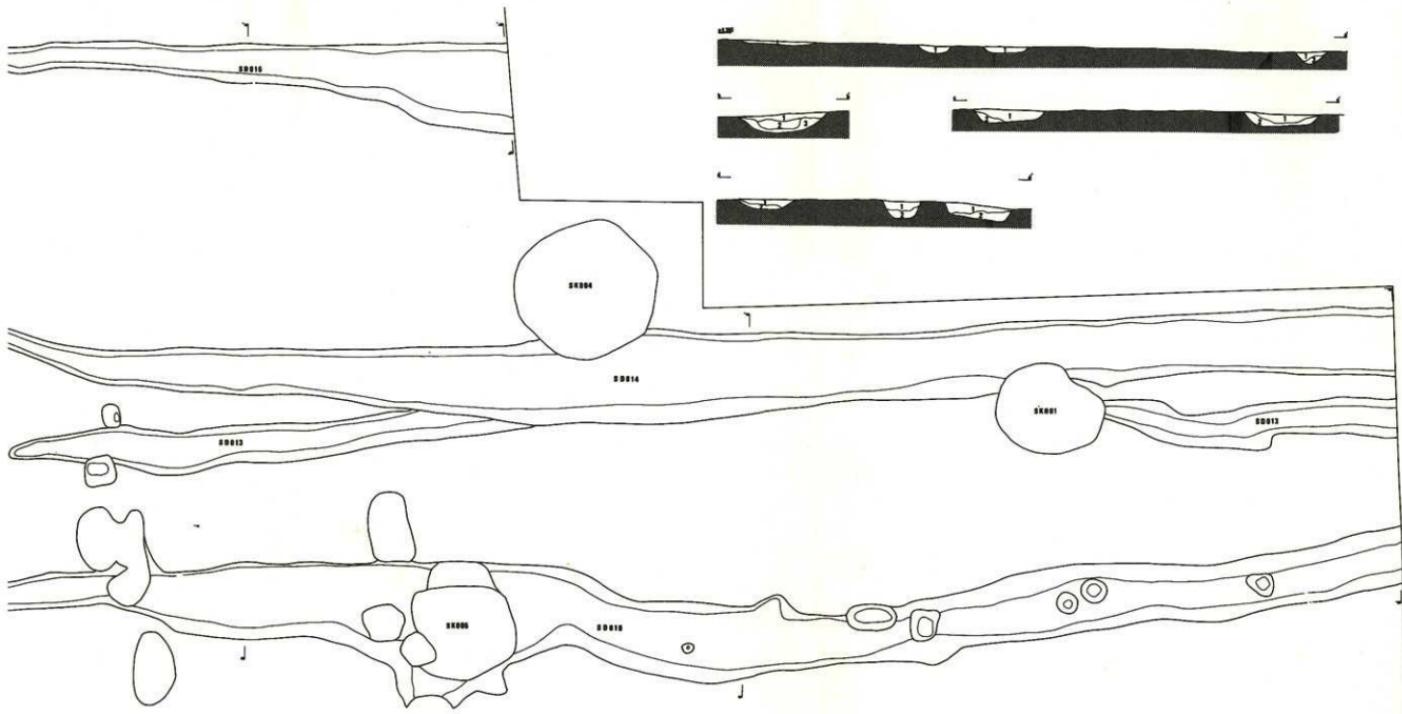
覆土は、3層に細分される。1層は暗褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は暗茶褐色土層で、しまりあり、粘性強い。3層は明褐色土層、しまりあり、粘性やや強い。

遺物の出土はない。

#### SD016 (第18図)

C-7区に所在する。本址はSD017に切られており、残存部は北東一南東方向に弧を描いて走っている。残存長約3.6m、幅約40cm、深さは最深部で18cmを測り、最浅部との比高差はあまりなく、ほぼ平坦である。断面形は碗状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、暗褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。



第17図 S D010-013~015

遺物の出土はない。

#### S D017 (第18・19図)

A～C-5～7区に所在する。本址は、S D016、018、019、020を切っており、S K008、010、S D022に切られている。ほぼ南北方向にクランク状に屈曲しながら延びており、南方向はS K008に切られ、北方向はS D022に切られている。残存長約27.2m、幅約70～90cm、深さは最深部で43cmを測り、最浅部との比高差は20cmである。断面形はV字状を呈しており、平坦部はほとんどない。

覆土は、3層に細分される。1層は暗褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は暗茶褐色土層で、しまりあり、粘性強い。3層は明褐色土層、しまりあり、粘性やや強い。

遺物は、碗、皿等の小片のみである。

#### S D018 (第18図)

B-7区に所在する。本址はS D017に切られている。ほぼ東西方向に走っており、東方向は調査区域外まで延びている。西方向はS D017に切られているため、残存長1.3mと短いものとなっている。幅は約40cm、深さは最深部で20cmを測り、最浅部との比高差はあまりなく、平坦である。断面形は皿状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は単一層で、暗褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S D019 (第19図)

A～C-5区に所在する。本址はS D020を切っており、S K009、010、017に切られている。ほぼ南北方向に走っており、南方向は南西方向にわずかに屈曲し、途中で立ち上がっている。S K009、010に切られている付近で、S字状にゆるく屈曲し、北方向も南方向と同様に途中で立ち上がっている。残存長約18.7m、幅約30～80cm、深さは最深部で14cmを測り、最浅部との比高差は6cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底は平坦である。

覆土は単一層で、暗褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S D020 (第19図)

A～B-5区に所在し、S D017、019に切られており、重複関係にある遺構の中では最も古いと考えられる。ほぼ南北方向にS D017、019と並行して走っており、南方向は南東方向へ屈曲

した辺りで、S D017に切られている。北方向は調査区域外にまで延びている。また本址の南方へ屈曲している方向と、S D018との位置関係から、両者の溝状造構は同一のものである可能性が考えられる。残存長約9.4m、幅約30~60cm、深さは最深部で15cmを測り、最浅部との比高差は6cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は單一層で、暗茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。遺物の出土はない。

#### S D021 (第19図)

A~C-5区に所在する。ほぼ南北方向に走っており、S D022に切られている。当初はそれぞれ別の溝状造構と把握していたが、位置関係から同一のものと判断した。北方向は調査区域外まで延びており、南方向はS D022と接している。残存長は切られている部分を含めて、約18.1m、幅約30~90cm、深さは最深部で36cmを測り、最浅部との比高差は10cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

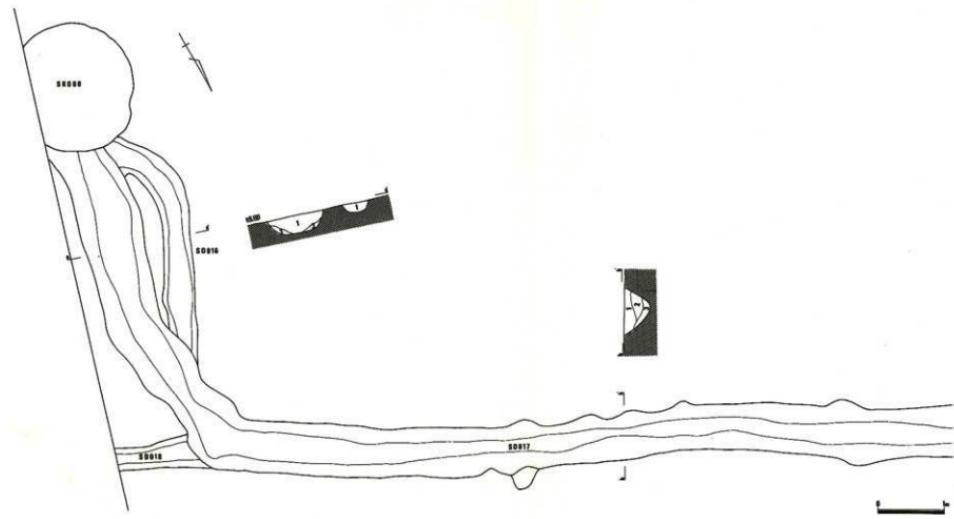
覆土は單一層で、暗茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。遺物の出土はない。

#### S D022 (第19・21・22図)

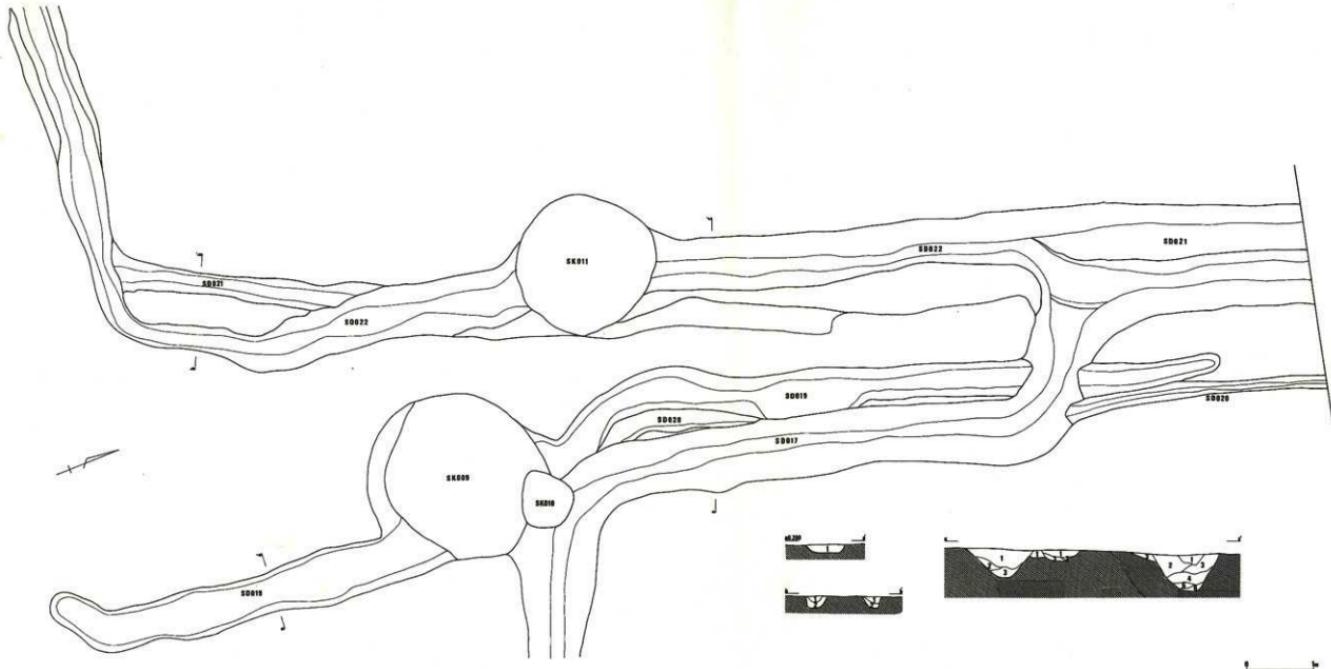
B~C-2区、C-3・4区、A~C-5区に所在する。A~C-5区ではほぼ直線的に約18m、ほぼ南北方向に走り、途中でS D017、021を切り、またS K011に切られている。北端は調査区域外にまで延びている。南方向はC-5区では西に方向を変え、C-3区まで約25m、南東~北西方向に弧状を呈して走っており、SK 012を避けるように走り、C-2区とC-3区の境界辺りで北方向へ屈曲し、再び南北方向となる。途中S D023に切られている。B~C-2区ではほぼ南北方向に約16m、S字状に屈曲し、北端はS D030に接している。幅は40~80cm、深さはB-5区の最深部で54cm、C-2区の最浅部で20cmを測り、比高差は34cmである。断面形は鍋底状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は、6層に細分される。1層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は明褐色土層で、若干砂を含む。しまりややあり、粘性弱い。3層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。4層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は暗茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は黄褐色土層で標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあまりなく、粘性弱い。

遺物は山茶碗、かわらけの他、天目茶碗、皿、摺鉢が出土しているが、いずれも小片である。



第18図 S D016~018



第19图 S D017-019-022

#### S D 023 (第22図)

C-1～3区に所在する。本址はS D022を切っている。ほぼ東西方向に直線的に走っており、C-3区では90°に南方向へ屈曲して調査区域外へ延びている。西方向も同様である。残存長約27.2m、幅約40cm、深さは最深部で20cmを測り、最浅部との比高差は7cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、明茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。遺物の出土はない。

#### S D 024 (第21・22図)

B・C-3区に所在する。北方向はS D022に接しており、南方向へは約3.2m走り、途中S D025に切られている。B-3区とC-3区の境界付近で東方向にはほぼ90°屈曲して、途中で立ち上がっている。残存長約5.8m、幅約50cm、深さは最深部で15cmを測り、最浅部との比高差は7cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、明茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性弱い。遺物の出土はない。

#### S D 025 (第22図)

B-2・3区に所在する。ほぼ東西方向に走っており、西方向はS D022に接している。途中S字状に屈曲し、S D024を切り、東方向は途中で立ち上がって来る。残存長約8.5m、幅約20～60cm、深さは最深部で12cmを測り、最浅部との比高差は5cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、暗褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性やや強い。遺物の出土はない。

#### S D 026 (第22図)

A・B-4区に所在する。ほぼ南北方向に走っており、北方向は調査区域外まで延びている。南方向は途中で立ち上がっており、S D027と接している。残存長約8.5m、幅約20～60cm、深さは最深部で12cmを測り、最浅部との比高差は5cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、暗褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性やや強い。遺物の出土はない。

#### S D 027 (第22図)

B-3・4区に所在する。東方向はS D026に接している。西方向に10.5mの所では北方向に90°屈曲し、北方向は6.3mの所でS D030に接する。屈曲する付近でS D024、028と接している。南北方向に走っている部分の一部は試掘調査時の掘り過ぎによって失われている。残存長約16.8m、幅約25~70cm、深さは最深部で12cmを測り、最浅部との比高差は6cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、明茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性やや強い。

遺物の出土はない。

#### S D 028 (第22図)

B-2・3区に所在する。ほぼ東西方向に走っており、西方向はS D022、東方向はS D027にそれぞれ接している。残存長約6.4m、幅約25cm、深さは最深部で8cmを測り、最浅部との比高差はあまりなく、平坦である。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、明茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性やや強い。

遺物の出土はない。

#### S D 029 (第22図)

B-2区に所在し、北東-南西方向に直線的に走っている。北東方向はS D030に接し、南西方向はS K014に接している。残存長約5.3m、幅約40~60cm、深さは最深部で28cmを測り、最浅部との比高差は21cmである。断面形は皿状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

覆土は単一層で、明茶褐色土層、標準土層第V層の砂を若干含み、しまりなく、粘性やや強い。

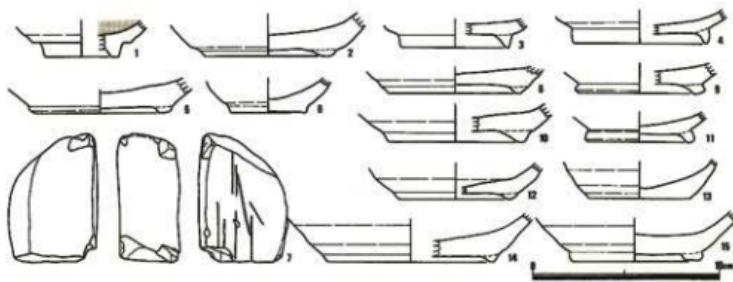
遺物の出土はない。

#### S D 030 (第22図)

B-1~3区に所在する。ほぼ東西方向に走っており、西方向は調査区域外まで、東方向はB-3区の中央付近で北方向に屈曲しているようである。本址は、ほとんどが調査区域外に抜がっている。残存長約18.2m、幅は全幅が検出されていないが、残存部で約1.8mである。深さは最深部で73cmを測る。比高差は32cmである。断面形は鍋底状を呈しており、溝底はほぼ平坦である。

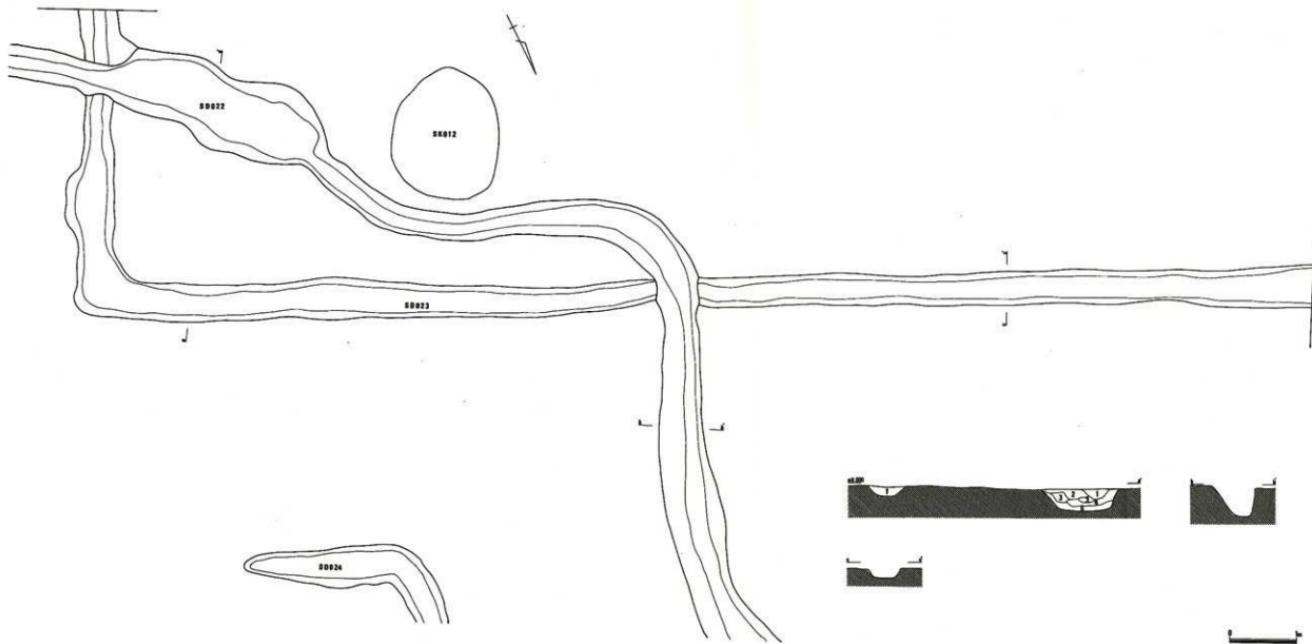
覆土は、7層に細分される。1層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は明褐色土層で、若干砂を含む。しまりややあり、粘性弱い。3層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。4層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は暗茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は明褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。7層は黄褐色土層で標準土層第V層の砂を多量に含む。しまりあまりなく、粘性弱い。

遺物は天目茶碗、茶入、皿等が出土しているが、図示し得るものは1点もない。

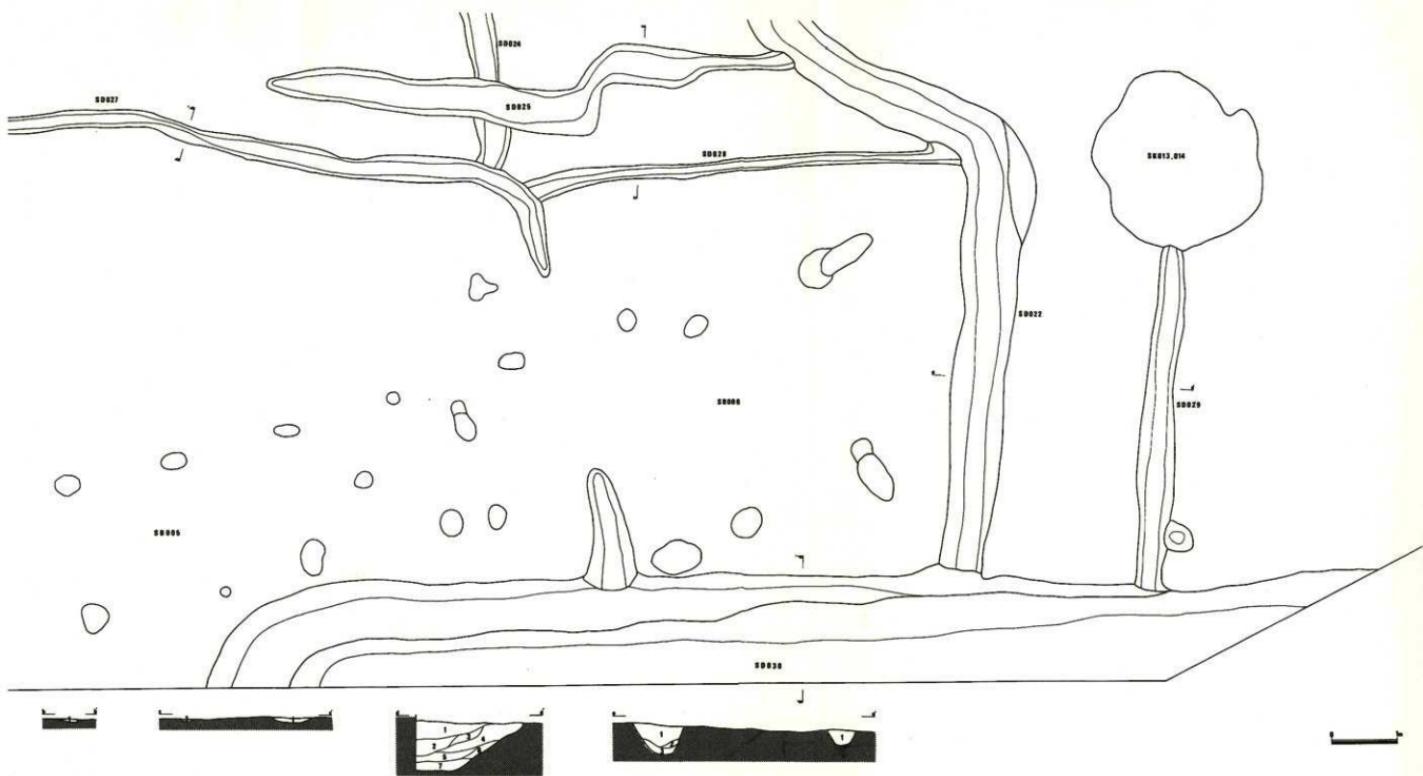


第20図 S D出土遺物





第21図 S D022~024 (C-1~3区)



第22図 S D022-024~030 (B-1~4区)

### 第3節 土坑

#### S K 001 (第23図)

B-10区のほぼ中央に所在する。S D013、014を切って掘り込んでいる。規模は長軸165cm、短軸135cmを測る。深さは、最深で65cmである。平面形は、不整な橢円形を呈している。坑底はほぼ平坦な皿状である。

覆土は、2層に細分される。1層は明褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S K 002 (第23図)

A-12区南西寄りに所在する。調査区域内では約半分しか確認できなかったため、調査区をこの部分だけ拡張して調査を行った。規模は長軸130cm、短軸110cmを測る。深さは、最深で25cmである。平面形は、不整な橢円形を呈している。坑底は南東側が若干高くなっているが、ほぼ平坦な皿状である。

覆土は、単一層、明褐色土層で、しまりややあり、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S K 003 (第23図)

B-14区に所在する。S D006、011を切って掘り込んでいる。規模は長軸80cm、短軸75cmを測る。深さは、最深で50cmである。平面形は、不整な円形を呈している。坑底はほぼ平坦な皿状である。

覆土は、2層に細分される。1層は黒褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。2層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物(第27図)は、山茶碗(1)が1点出土している。口径17.8cm、高台径8.6cm、器高5.1cm、現存率約1/4である。色調は明灰色、口縁部がわずかに外反し、底部内面は広い。高台は断面三角形のものが八の字状に開いて付けられている。湖西産。

#### S K 004 (第23図)

C-10区に所在する。S D014を切って掘り込んでいる。調査区域内では全体が確認できなかつたため、調査区をこの部分だけ拡張して調査を行った。規模は長軸215cm、短軸210cmを測る。深さは、最深で55cmである。平面形は、不整な円形を呈している。坑底は碗状である。

覆土は、5層に細分される。1層は黒褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。2層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。3層は明褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。4層は黒色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は黄褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。

遺物（第27図）は、山茶碗（2）が1点出土している。高台径6.4cm、現存率底部約1/2である。色調は暗灰色、高台は高く付けられており、底部内面の中央はやや窪んでいる。皿山產。

#### S K 005 (第23図)

C-10区に所在する。S D 010を切って掘り込んでいる。規模は長軸150cm、短軸145cmを測る。深さは、最深で55cmである。平面形は、不整な隅丸方形を呈している。坑底は平坦な皿状である。

覆土は、4層に細分される。1層は明茶褐色土層、しまりなく、粘性弱い。2層は暗茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。3層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。4層は黒褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物は、天目茶碗の小片が出土したのみである。

#### S K 006 (第23図)

B-11区に所在する。規模は長軸185cm、短軸170cmを測る。深さは、最深で40cmである。平面形は、不整な楕円形を呈している。坑底は平坦な皿状である。

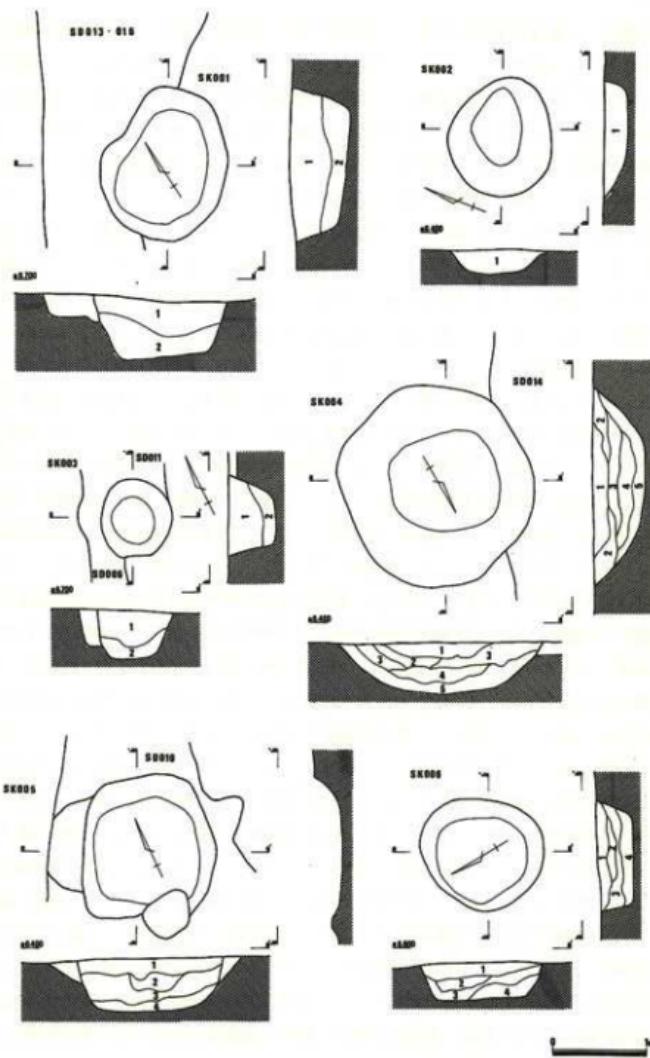
覆土は、4層に細分される。1層は明茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。2層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。3層は暗茶褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。4層は黄褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物の出土はない。

#### S K 007 (第24図)

C・D-7・8区に所在する。東側にはS B 004が隣接している。規模は長軸440cm、短軸345cmを測る。深さは、最深で110cmである。平面形は、不整な楕円形を呈している。坑底は平坦な皿状であるが、壁面は段を1つ持ち角度を変えて立ち上がっている。

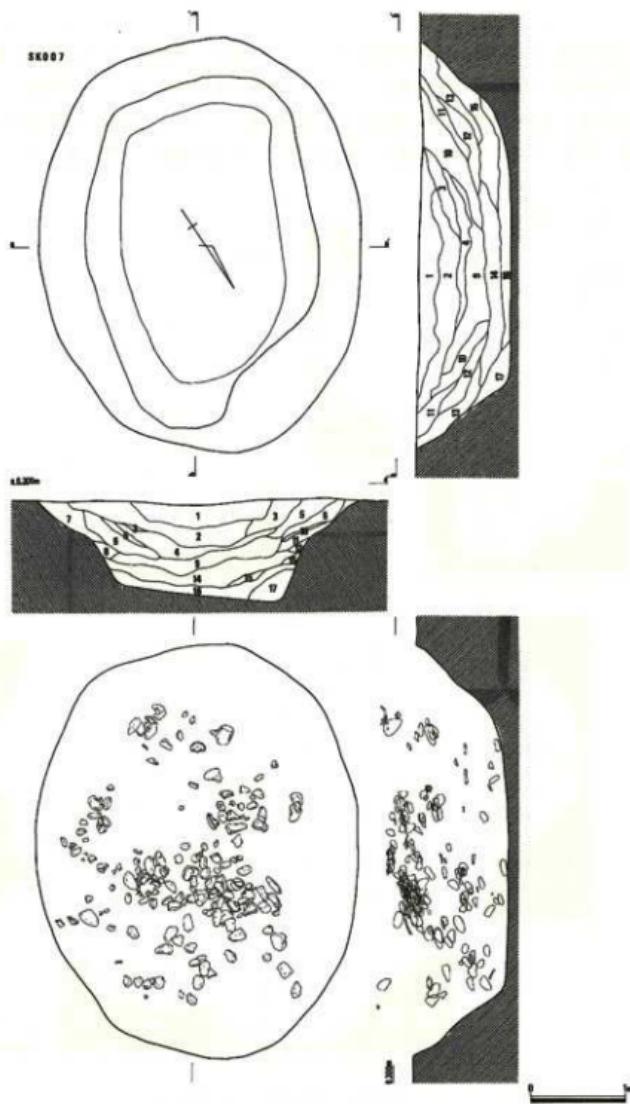
覆土は、17層に細分される。1層は明褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。2層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。3層は暗茶褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。4層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は明灰色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。7層は明褐色土層、しまりあまりなく、



第23図 SK001~006

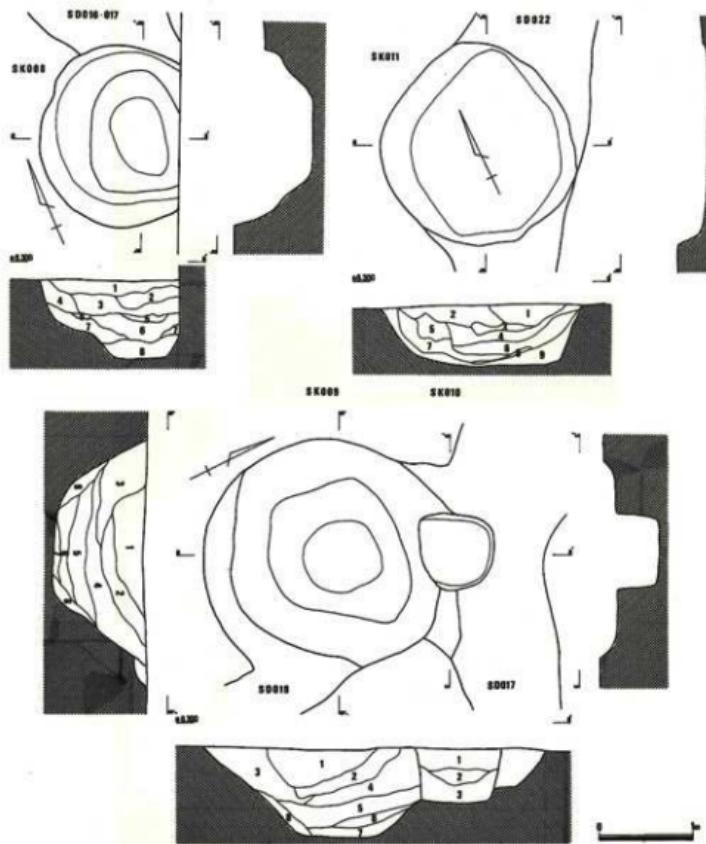
粘性やや弱い。8層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。9層は暗茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。10層は明灰色土層、しまりややあり、粘性弱い。11層は明褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。12層は明黄褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。13層は黄褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。14層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。15層は明褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。16層は暗黄褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。17層は黄褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物は（第27、28図）天目茶碗、皿、摺鉢等が出土している。3は山茶碗の底部片で現存率は約1/4である。高台径4.4cm、色調は明灰色、高台は断面三角形のものが八の字状に開いて付けられている。湖西産。4は丸碗の底部で現存率は全周、高台径は4.6cmである。色調は乳白色、体部下半部に1本、高台部に2本の線がそれぞれ入れられている。有田産。5は丸碗と考えられる底部片で現存率はほぼ全周である。高台径は4.6cmを測る。体部外面にはまず御深井釉が掛けられ、さらに外面には鉄釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。6は丸碗で、現存率は約1/7である。口径は12.8cm、内外面に茶褐色の鉄釉が掛けられており、外面には一条の黒褐色の鉄釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。7の天目茶碗は現存率約1/3で、口径は11.8cm、胎土の色調は黄白色である。内外面に鉄釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。8の天目茶碗は現存率約1/2、口径7.2cm、高台径3.5cm、器高3.9cmである。胎土の色調は赤褐色で、内外面に鉄釉が掛けられているが、溶けきっておらず、黄褐色を呈している。高台は削り出し。志戸呂産。9の天目茶碗は現存率約1/2、口径11.4cmである。胎土の色調は明灰色で内外面に鉄釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。10の天目茶碗は現存率約1/3、口径13.8cm、胎土の色調は黄白色で内外面に鉄釉が掛けられている。瀬戸・美濃産。11の天目茶碗は現存率は底部全周、高台径4.7cm、胎土の色調は灰褐色で内外面に鉄釉が掛けられている。志戸呂産。12は皿で現存率約1/3、口径11.7cm、高台径4.8cm、器高2.6cmを測る。色調は赤褐色で口縁部には鉄釉が掛けられている。高台は削り出し。志戸呂産。13の皿は現存率約1/3、口径12.2cm、高台径7.2cm、器高2.0cmを測る。色調は灰白色で内外面に白釉が掛けられている。高台は削り出し。瀬戸・美濃産。14は鉢であろうか？現存率は底部約1/2、底径12.6cmである。胎土の色調は赤褐色で内外面に鉄釉が掛けられているが、外面は溶けきっておらず、黄白色を呈している。志戸呂産。15の摺鉢は現存率約1/9で口径28.8cm、底径8.6cm、器高12.4cmを測る。梅目は9齒で幅は2.1cmである。色調は赤褐色。志戸呂産。16の摺鉢は現存率口縁部約1/6で口径22.4cmを測る。柳目は7齒で幅は1.5cmである。色調は赤褐色。志戸呂産。17の摺鉢は現存率口縁部約1/7で口径23.2cmを測る。梅目は7齒で幅は2.8cmである。色調は明茶褐色。志戸呂産。18の摺鉢は現存率底部約3/4で底径11.2cmを測る。柳目は15齒で幅は3.2cmである。色調は暗褐色。瀬戸・美濃産。19は水指で現存率約1/3、底径



第24図 SK007及び遺物出土状況

は7.6cmである。外面には鉄軸が掛けられている。瀬戸・美濃産。20は壺か鉢と考えられる。現存率は約1/4で底径は9.0cmである。内外面に白釉が掛けられている。唐津産。21は砥石で長さ6.4cm、幅3.4cm、厚さ2.1cmを測るが、片側は欠損している。表裏及び両側面が砥面である。22は瓶の把手である。22は寛永通宝で寛文8年から天和3年まで16年間鋳造されたものである。



第25図 S K008~S K008~011

#### S K 008 (第25図)

C-7区に所在する。SD016、017を切って掘り込んでいる。規模は全体が検出されていないが、直径約200cmの不整な円形を呈したものと考えられる。深さは85cmを測り、坑底は平坦な皿状である。壁面は段が1つ付き、角度を変えて曲線的に立ち上がってている。

覆土は、8層に細分される。1層は黒褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は明褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。3層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性やや弱い。4層は明褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は黒色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は明茶褐色土層、しまりあり、粘性弱い。7層は暗褐色土層、しまりあり、粘性やや弱い。8層は灰色土層、しまりあり、粘性やや弱い。

遺物は、皿の小片が出土したのみである。

#### S K 009 (第25図)

C-5区に所在する。SD019を切って掘り込まれているが、SK010に切られている。規模は長軸230cm、短軸225cm、深さは、最深で110cmを測る。平面形は不整な円形を呈している。坑底は碗状である。壁面は段が1つ付き、緩やかに立ち上がってている。

覆土は、7層に細分される。1層は明茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は明褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや弱い。3層は黒褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや弱い。4層は明灰色土層、しまりややあり、粘性弱い。5層は暗褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は明灰色土層、しまりあり、粘性弱い。7層は暗褐色土層、しまりあり、粘性やや弱い。

遺物の出土はない。

#### S K 010 (第25図)

B・C-5区に所在する。SD017、SK009を切って掘り込まれている。規模は長軸80cm、短軸75cm、深さは、最深で60cmを測る。平面形はほぼ円形を呈している。坑底は皿状である。

覆土は、3層に細分される。1層は黒褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや強い。2層は暗褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや弱い。3層は明褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや弱い。

遺物の出土はない。

#### S K011 (第25図)

B・C-5区に所在する。S D022との新旧関係は不明である。規模は長軸220cm、短軸215cm、深さは、最深で65cmを測る。平面形はほぼ円形を呈している。坑底は平坦な皿状である。

覆土は、9層に細分される。1層は暗褐色土層、しまりなく、粘性やや強い。2層は暗茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性やや弱い。3層は明茶褐色土層、しまりなく、粘性弱い。4層は明褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。5層は明茶褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は明茶褐色土層、しまりあり、粘性弱い。7層は黒褐色土層、しまりあり、粘性やや弱い。8層は明黄褐色土層、しまりあり、粘性弱い。9層は黄褐色土層、しまりあり、粘性やや弱い。

遺物の出土はない。

#### S K012 (第26図)

C-3区に所在する。S D022が本址を避けるように隣接して走っている。規模は長軸195cm、短軸160cm、深さは、最深で75cmを測る。平面形は不整な楕円形を呈している。坑底は平坦な皿状である。

覆土は、5層に細分される。1層は明褐色土層、しまりなく、粘性やや弱い。2層は明茶褐色土層、しまりなく、粘性やや弱い。3層は明褐色土層、しまりなく、粘性弱い。4層は暗褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。5層は灰色土層、しまりややあり、粘性弱い。

遺物は、天目茶碗の小片が出土している。

#### S K013 (第26図)

B-2区に所在する。S K014に切られている。規模は長軸90cm、短軸80cm、深さは、最深で70cmを測る。平面形はほぼ円形を呈している。坑底は平坦な皿状である。壁面は崩落していると考えられ、そのための段が付いている。

覆土は、3層に細分される。1層は黒褐色土層、しまりなく、粘性弱い。2層は暗褐色土層、しまりなく、粘性弱い。3層は明褐色土層、しまりなく、粘性弱い。

遺物の出土はない。

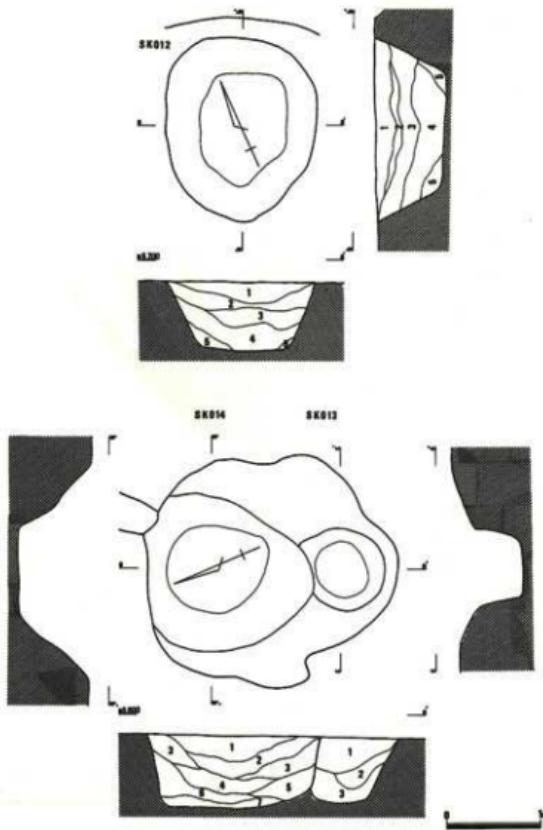
#### S K014 (第26図)

B-2区に所在し、S K013を切って掘り込まれており、北東方向はS D029と接している。規模は長軸180cm、短軸165cm、深さは、最深で80cmを測る。平面形は不整な楕円形を呈している。坑底は平坦であるが、南側が若干高くなっている。壁面はS K013と同様に崩落していると考え

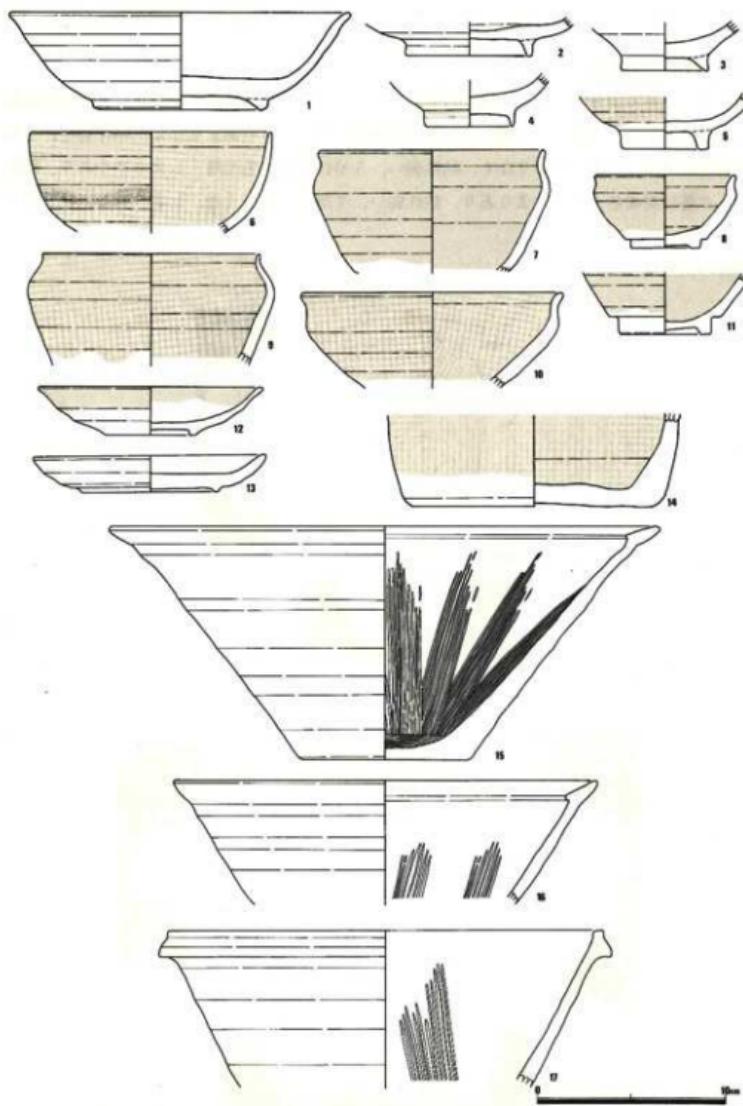
られ、それに伴う段を有している。

覆土は、7層に細分される。1層は暗褐色土層、しまりなく、粘性やや強い。2層は暗茶褐色土層、しまりなく、粘性やや弱い。3層は明褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。4層は明茶褐色土層、しまりあまりなく、粘性弱い。5層は明黄褐色土層、しまりややあり、粘性弱い。6層は黒褐色土層、しまりあり、粘性弱い。7層は黄褐色土層、しまりあり、粘性やや弱い。

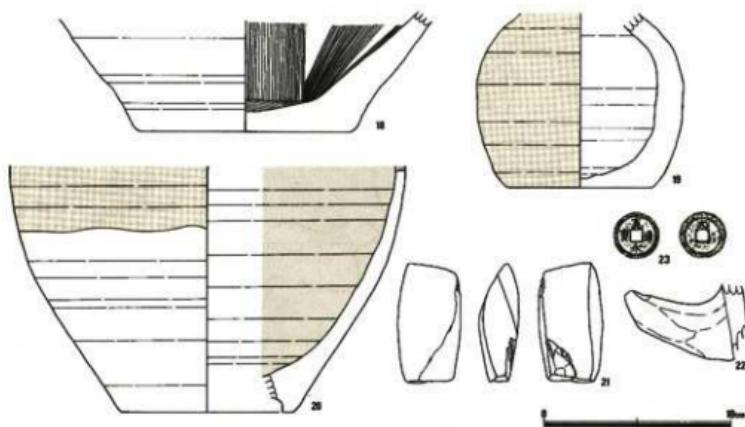
遺物の出土はない。



第26図 SK012~014



第27図 SK003・004・007出土遺物



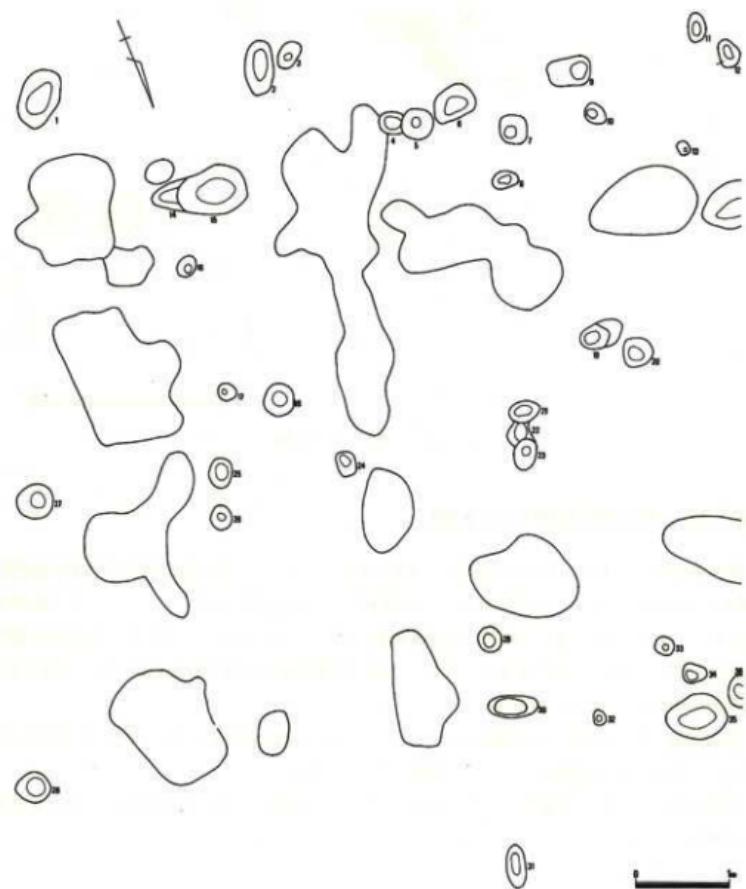
第28図 SK 007出土遺物

#### 第4節 ピット及びピット群

検出されたピットは、A～D-10区から14区に集中してみられ、その他の地区には掘立柱建物址のピット以外、全くみられない。ピットが集中している地区の中でも、さらに分布の疎密がみられ、C-11、12区（第15、29図）の分布密度が高い。ちょうどSD009と010に挟まれた地区である。ピット数は約100穴を数え、なかには掘立柱建物址になる可能性のあるものもあるが、配列が不十分なものばかりである。

分布が疎らなC-13区では4個のピット（48～52）がほぼ直線に並んでいるのがみられる。しかし、このピット列に対応するピットは確認されていない。

これらのピットからは遺物の出土はほとんどなく、山茶碗、土器片が若干出土したのみで図示し得るものはない。



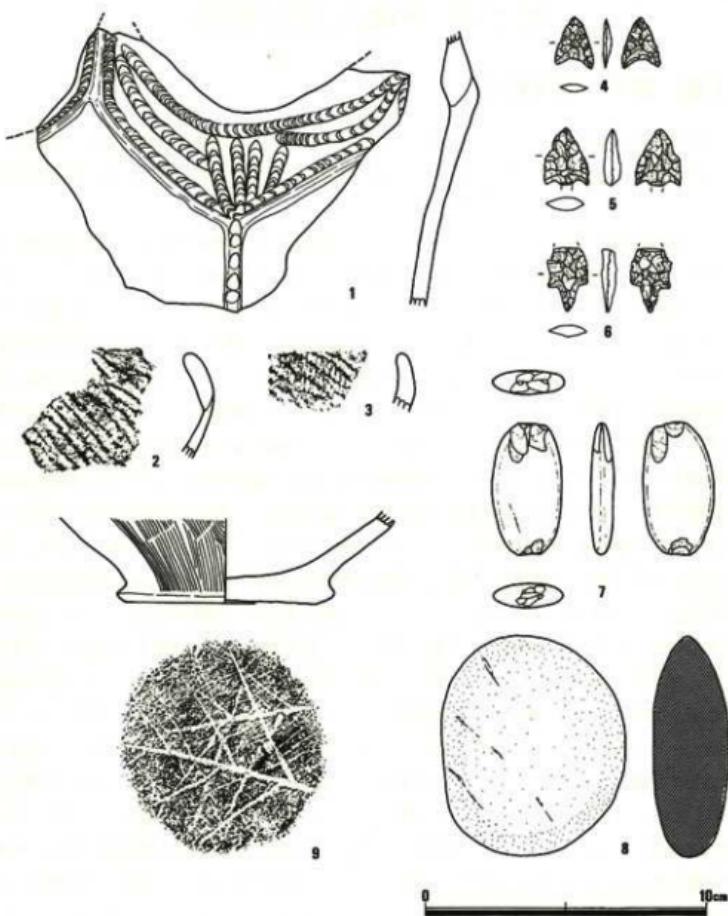
第29図 C-11区ピット群

## 第7章 遺構外出土遺物

### 第1節 繩文～古墳時代

当該期の遺物（第30図）は全て包含層からの出土であり、また遺構の存在は認められなかつた。包含層出土の繩文時代の遺物は、主に第Ⅳ層下位ないし第Ⅴ層にくい込むような状態で出土している。

1は、波状口縁を呈し、山形状の立ち上がりを示す深鉢の口縁部片である。単位は6単位と推定され、各突出部の波状間は円状を呈して連絡する。全体は波状帯をY状の懸垂文によって、縦方向に胴部に向かって垂下させ、区画している。また区画内はくの字状を呈する結節沈線によって、右方向（一部左方向）へ押し引きして周囲を充填し、残る中央部付近は同種結節沈線を、下方向に向かって押し引いている。区画外面はよく研磨され、胎土には金雲母を多量に含む。器厚は薄く、胴部からゆるやかに外反して立ち上がり、口縁部直下から覗く内澆する形態を呈する。屈曲部は貼り付けである。C-13区出土。2は口縁部片であるが、小突起を有するか、波状口縁を呈するものと考えられる。口唇部直下からR Lの繩文を施文しており、内面は範調整が顕著である。胎土には小石が多量にみられる。器厚は薄く、胴部からゆるやかに外反して立ち上がり、口縁部直下から内澆する。C-4区出土。3は、2と同一個体と考えられる。C-4区出土。4の石鐵は、基部抉入が浅く、側縁は直線的である。最大長1.8cm、最大幅1.4cm、厚さ0.3cm。石材は頁岩。B-3区出土。5は有茎石鐵であるが、茎部を欠損している。調整剝離は入念に行われている。側縁は、直線的であるが、基部からはほぼ垂直で中央部から角度を変える。現存長2.0cm、最大幅1.6cm、厚さ0.6cm。石材は粘板岩。C-11区出土。6の有茎石鐵は、先端を欠損している。調整剝離は粗雑である。現存長2.2cm、最大幅1.4cm、厚さ0.5cm。石材は頁岩。C-12区出土。7は石錐。両面とも入念に磨かれており、全面滑らかである。両端は打ち漬して紐掛けを作り出している。最大長4.7cm、最大幅2.5cm、厚さ0.9cm。石材は粘板岩。D-9区出土。8は磨石。片面のみ滑らかに磨かれている。最大長7.8cm、最大幅6.5cm、厚さ2.7cm。石材は安山岩。D-8区出土。9は、弥生時代後期から古墳時代前期の壺の底部片である。現存率は全周、底径は6.6cm。外面は縦方向に細かい刷毛目で調整されており、底部には木葉痕がみられる。内面は詳細不明。底部から内側にくの字状に屈曲して立ち上がっている。胎土には小石を多量に含んでいる。B-10区出土。



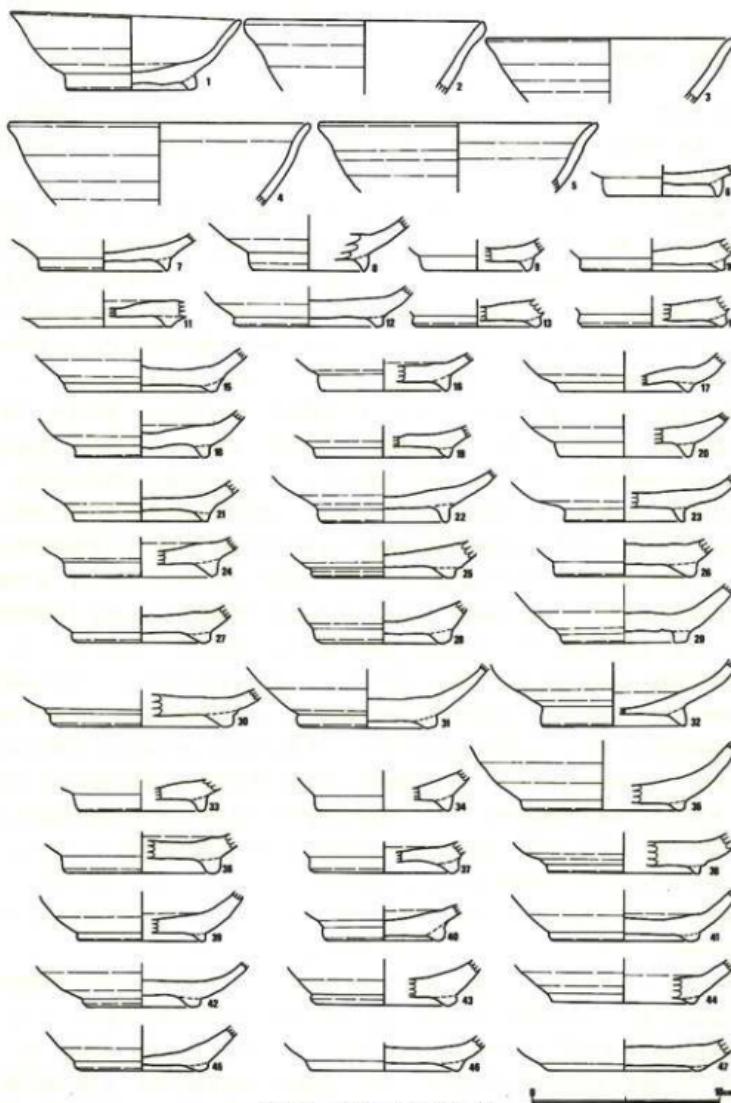
第30図 繩文～古墳時代出土遺物

## 第2節 中世

中世の遺物（第31・32図）では、山茶碗が量的には最も多く出土しているが、主に底部片であり、器形を把握できるものは非常に少ない。次いで小皿、かわらけが出土しているが、状況は山茶碗と同様である。

山茶碗は、1～53である。1の山茶碗は口径12.2cm、高台径6.6cm、器高4.0cmを測り、完形品である。C-12区で出土。口縁部は若干外反しながら開く。高台は付高台で外面垂直、内面は外傾する。底部の糸切り痕はなで消されている。色調は暗灰色で、口縁部に漬け掛け施釉をしている。渥美産。2～5の口縁部片もほぼ同様に外反しながら開いていく。8は断面三角形の高台が付けられ、外面はゆるく丸みを帯びて立ち、内面は外傾し、端部は鋭く尖る。底部内面には重ね焼きの痕跡がみられる。色調は暗灰色。11の高台は、断面三角形のものが付けられ、端部に稜鉢痕が残る。色調は暗灰色。12の高台は、外面垂直、内面は外傾し、端部は平坦である。底部外面には糸切り痕が残る。色調は暗灰色。16は内面に自然釉が掛かっている。底部外面には糸切り痕が残る。21の高台は、断面三角形のものが付けられ、端部には稜鉢痕が残る。糸切り痕はなで消されている。色調は明灰色。22の高台は、断面三角形の薄いものが若干開いて付けられている。高さは0.8cmと高い。底部外面には糸切り痕が残り、内面には自然釉が掛かっている。色調は暗灰色。25の高台は断面三角形で低く、粗雑なものが付けられている。底部外面には糸切り痕が残る。色調は明灰色。29の高台は、断面は四角形であり、端部には稜鉢痕がみられる。色調は暗青灰色。32の高台は、断面三角形で八の字状に開いて付けられている。色調は明灰色。35の高台は、粘土紐をなで付けたもので、あまり高さを持たない。38は、高台の外側に段を1つ有している。底部内面には煤が付着している。40の高台は、断面三角形で体部側面に付けられている。底部内面中央がやや窪む。色調は灰白色。42の高台は、断面が低い三角形を呈し、端部には稜鉢痕がみられ、粗雑さが目立つ。底部外面には糸切り痕が残っており、内面には重ね焼きの痕跡が残っている。色調は暗青灰色。44の高台は、粘土紐を両側からなで付けたものである。内面には重ね焼きの痕跡が残っている。色調は明灰色。47の高台は、粘土紐をなで付けたもので粗雑である。底部内面中央はやや窪んでいる。器面の荒れが著しい。色調は灰白色。53の高台は、低く押しつぶされたようになで付けられており、粗雑である。色調は明灰色。

54～58は、小皿である。56の小皿は、口径8.2cm、高台径3.8cm、器高2.0cmを測る。口縁部はほぼ直線的に開く。高台は断面台形のものが付けられており、糸切り痕はなで消されている。色調は暗灰色で、口縁部には自然釉が掛かっている。57の小皿は、口径8.4cm、高台径4.4cm、器高2.0cmを測る。口縁部は若干内湾しながら開く。底部には糸切り痕を残す。色調は暗灰色。



第31図 造構外出土遺物 (1)

58の小皿は、口径7.8cm、高台径5.0cm、器高1.5cmを測る。口縁部は直線的に開き、底部には糸切り痕を残す。色調は明灰色。

59～71は、かわらけである。59のかわらけは口径7.8cm、高台径4.8cm、器高1.6cmを測る。底部には糸切り痕が残り、器壁は厚い。63は口径7.6cm、高台径3.6cm、器高3.2cmと高く造られている。口縁部は内溝して開く。底部には糸切り痕が残る。

### 第3節 近世

近世遺物（第32・33図）も中世と同様に破片が多く、器形を把握できるものは少ない。

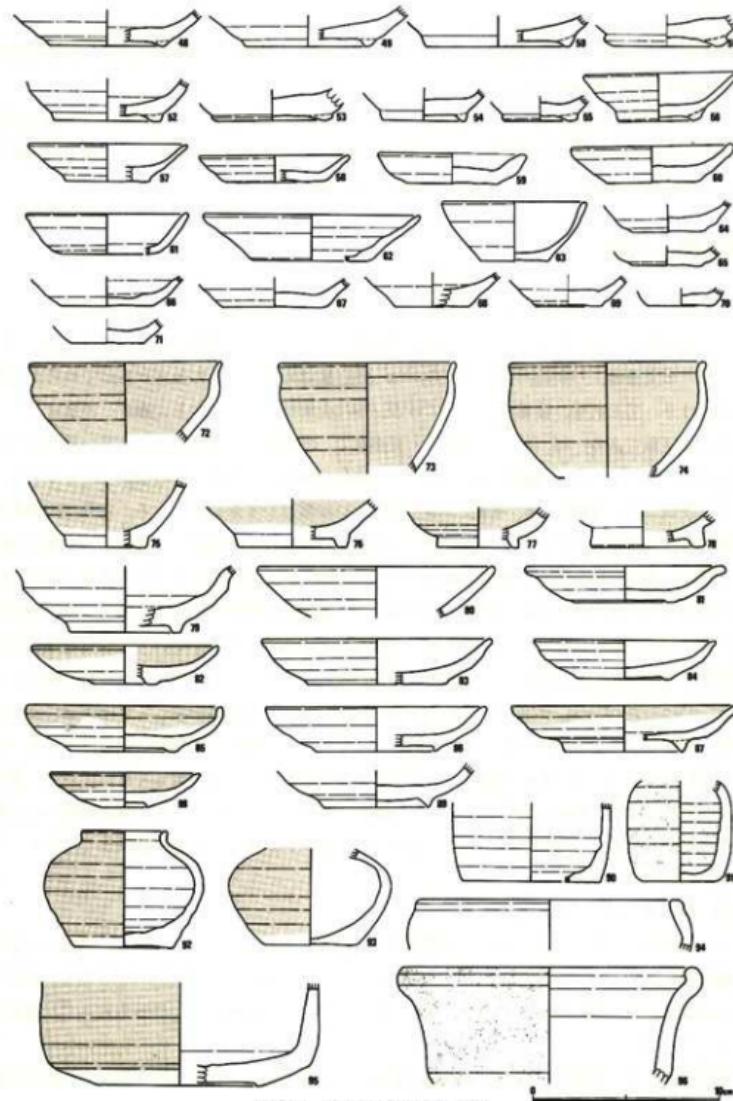
72～78は天目茶碗である。72～74は胴部片であるが、内外面に鉄軸が掛けられている。72、74が瀬戸・美濃産、73が志戸呂産である。75～78は底部片である。75は志戸呂産で内外面の鉄軸が溶けきっておらず、黄褐色を呈している。78は化粧掛けをしている。瀬戸・美濃産。

80～89は皿である。81、83、86は瀬戸・美濃産で、内外面に白釉が掛けられている。81は口径10.4cm、高台径5.4cm、器高2.0cmを測り、口縁部は外反して開く。高台は削り出しである。83は口径12.2cm、底径7.2cm、器高2.4cmを測り、口縁部はわずかに外反する。白釉は内面及び口縁部外面に掛けられている。86は口径11.6cm、高台径6.4cm、器高2.4cmを測る。口縁は内溝して開く。高台は削り出しで断面三角形を呈する。82、84、85、87、88は志戸呂産である。82は口径10.0cm、高台径3.4cm、器高2.1cmを測る。口縁部はわずかに内溝して開き、高台は削り出しで、外側は溝状に窪んでいる。内面及び口縁部外面に灰釉が掛けられている。84は口径9.6cm、高台径4.8cm、器高2.1cmを測り、口縁部は若干外反して開き、高台は削り出しで低く造られている。85は口径10.4cm、高台径5.6cm、器高2.4cmを測る。口縁部は内溝してほぼ垂直に立ち上がり、体部は深く造られている。高台は削り出しである。口縁部に鉄軸が掛けられている。87は口径12.0cm、高台径6.2cm、器高2.4cmを測る。口縁部はわずかに外反して開いている。高台は貼り付けており、断面三角形を呈する。口縁部に鉄軸が掛けられている。88は口径8.0cm、高台径2.4cm、器高1.8cmとやや小さい。口縁部はほぼ直線的に開き、高台は削り出しである。口縁部に鉄軸が掛けられている。

90は鉢と考えられるが、不明である。

91～93は茶入である。91は瀬戸・美濃産で、内外面に灰釉が掛けられている。底部には糸切り痕が残る。92、93は志戸呂産である。92は口径4.4cm、底径5.2cm、器高6.2cmを測る。底部には糸切り痕がみられ、外面には鉄軸が掛けられている。93は鉄軸が溶け切っておらず、黄褐色を呈している。

94は志戸呂産の水指で、外面に自然釉が掛かっている。95は、高台は削り出しで外面には鉄



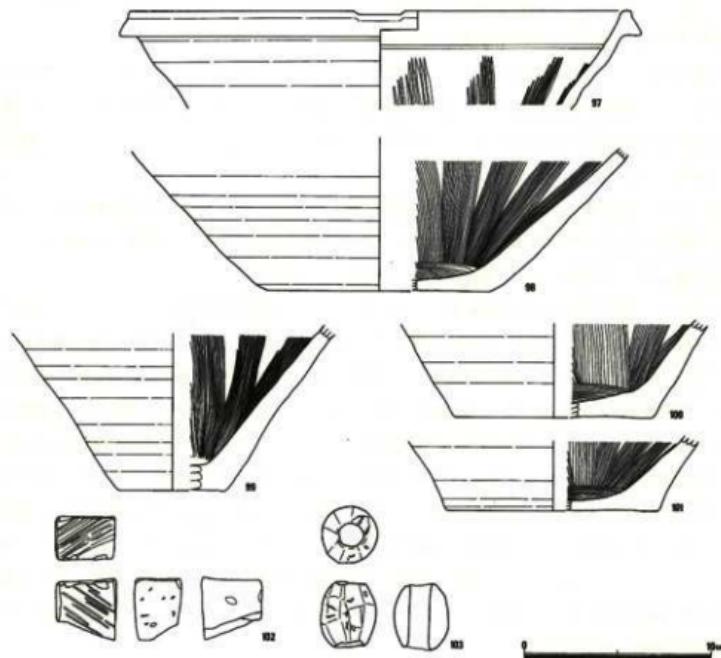
第32図 造構外出土遺物 (2)

軸が掛けられている。高台の外側にはサヤの跡がみられる。96は志戸呂産で口縁部が内湾しており、外面には灰軸が掛けられている。

97~101は摺鉢である。97は志戸呂産で口縁部には片口が指頭によって押し出されており、内面には1条の沈線が巡っている。梅目は9歯で幅は2.1cmを測る。98~101は志戸呂産の底部片である。櫛目及び幅は、それぞれ98が10歯で幅は2.5cm、99が12歯で幅は2.8cm、100が10歯で幅は2.9cm、101が15歯で幅は3.2cmを測る。

102は砥石で一部欠損している。現存長3.2cm、幅3.2cm、厚さ2.5cmを測る。表裏、両側面及び端部が底面であり、表と端部には擦痕がみられる。

103は土錘である。径3.0cmの大きさに、径1.1cmの穿孔を有する。



第33図 造構外出土遺物 (3)

## 第8章 まとめ

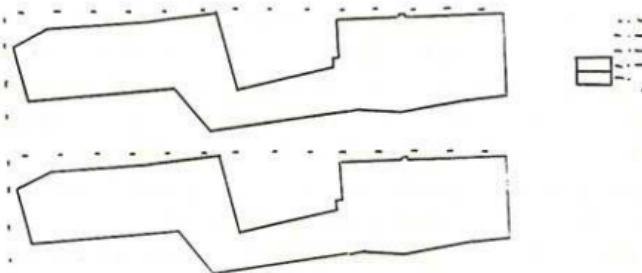
縄文時代の遺物は、土器片の他、石鎌、石錐、磨石が出土しているが、全て遺構に伴うものではなく、単発的な出土状況を呈している。また分布に関しても、いずれかに偏る等の傾向は特に認められない。出土状況は、第Ⅳ層下位ないし第Ⅴ層にくい込むような状態で出土している。このことから、砂丘形成後まもなく当時の人々がこの地を訪れ、生活の場としていたと考えられる。しかし、今回の調査区域からは住居址等の遺構は検出されていない。現段階において、本町南部の砂丘地帯に縄文時代の集落が存在したか否かについては、推定の域を脱することはできないが、本町の南岸には遠州灘が拡がっていること、また石錐が出土することからも漁業を行っていたことがわかり、それに携わっていた人々が集落を営んでいたことは十分に考えられるであろう。また砂丘地帯でなくとも、周辺の丘陵にもこれらの状況から考えて、縄文時代の集落が存在する可能性は高いであろう。

弥生時代後期から古墳時代前期の土器片が出土しているが、縄文時代の遺物と同様に単発で出土しており、遺構の検出も認められない。隣接する砂丘地帯では、磐田郡浅羽町の権現山遺跡から方形周溝墓が検出されている。この時期には砂丘はほぼ安定していると考えられ、縄文時代と同様な様相が考えられるであろう。

中世、近世の遺構外出土遺物の分布は第34図に示したとおりである。これは遺物のほとんどが破片で復元することができず、個体数をだすことができないため、全ての遺物の重量をグリッド毎に計測して、5段階に分けて図示したものである。

中世ではC-12区の分布密度が最も高く、B-10、11、C-11区がそれに次ぐ。C-11、12区にはビット群があり、遺構の配置と分布の密度の高さがよく一致しているが、B-11区の場合は全く逆の様相を呈している。その他の比較的分布密度の高いグリッドに関しては、遺構の有無とはあまり関係がないことがいえ、また遺構が存在するグリッドでも全体的に遺物の出土量は少ないことがいえる。大きくみれば中世の遺物分布はA～D-7～14区に偏る傾向が認められる。遺物は山茶碗が主体を占めているが、大部分が破片で復元できるものは極めて少ない。またほとんどが包含層出土であり、底部片が多い。それらの底部片の形状から12世紀後半から13世紀前半の年代が充てはめられる。山茶碗は湖西及び渥美産が大部分を占め、若干皿山産のものが出土している。周辺には清ヶ谷古窯跡や東遠江系の諸窯が操業しているにもかかわらず、距離的にも遠い湖西・渥美産の山茶碗が主体を占める点は、生産地と消費地との関係及び流通について重要な問題と思われる。

近世の遺物分布は、中世のものと差異が認められる。最も密度が高いグリッドは、C-7、10、D-13区で、次いでB-10、C-9、11、D-11、12区と一ヵ所に集中している傾向が認められる。



第34図 中世（上）・近世（下）遺構外出土遺物量分布図

これらのグリッドには掘立柱建物址をはじめ、ピット群、溝状遺構、土坑と遺構の密度も高く、密接な関係があることが窺える。A～C-1～6区では若干ではあるが、中世より遺物の出土量が多いことがいえ、逆にA～D-12～14区では少ないことがいえる。したがって、近世の遺物分布はA～C-3区からA～D-11区に偏る傾向が認められる。近世の遺物は天目茶碗、茶入、摺鉢、皿等バラエティーに富んでいる。近世の遺物も破片が多いが、復元できるものからこれらの年代は16世紀後半から17世紀前半のものといえる。これらの遺物は瀬戸・美濃産、志戸呂産のものが大半を占めており、他には初山、有田、唐津産のものが若干含まれている程度である。瀬戸・美濃産と志戸呂産との割合の差はほとんどなく、また産地によって特定の器種のみ搬入されているという傾向は認められない。

これらのことから、縄文時代等の遺物が若干出土してはいるが、糸縄遺跡は大きく2つの時期に分けることができる。第Ⅰ期は、12世紀後半から13世紀前半、第Ⅱ期は16世紀後半から17世紀前半であり、また13世紀後半から16世紀前半までは断絶するようである。したがって本遺跡から検出された遺構は、これらの時期に属することが考えられる。

掘立柱建物址の柱穴内からは、天目茶碗、摺鉢、皿等が出土している。山茶碗もわずかながら出土しているが、これは流れ込みによるものであろう。糸縄遺跡では黒褐色土層からこれらの遺物が出土するが、掘立柱建物址の柱穴にもこの土が混ざっていること、遺構の主軸がほぼ同じ方向に一致すること、また前述した遺構外出土遺物の分布ともほぼ一致することから、これらの掘立柱建物址は第Ⅱ期、16世紀後半から17世紀前半に属するものと考えられる。尚、SB005、006からは遺物の出土はないが、覆土の状態から同時期のものであると判断した。

溝状遺構の時期は、第Ⅰ期と第Ⅱ期とに二分できる。第Ⅰ期に所属する溝状遺構はSD001～011、013～015である。SD001からは天目茶碗が出土しているが、これは後に流れ込んだものと思われ、また覆土の状態、他の溝状遺構との位置関係からみて、第Ⅰ期に所属するものとし

て差支えないであろう。S D005は遺物の出土はないが、山茶碗、小皿が出土している S D003に切られていること、また同時期の山茶碗が出土している S D001、002との位置関係から、当該期と大差のない時期と考えられる。S D015からも遺物の出土はないが、覆土の状態、当該期の山茶碗を出土している S D010、013、014が同じ方向に隣接しているという位置関係から、ほぼ同時期のものと判断した。第II期に所属すると考えられる溝状造構は S D012、016~030である。S D012は、第I期と考えられる S D010と接しており、これが接続しているのか、S D012が S D010を切っているのかは不明確であるが、志戸呂産の茶入等が出土していることから、第II期に所属すると考えられる。他に当該期の遺物が出土している溝状造構は S D017、022、030の3条のみであるが、それぞれの溝状造構の重複関係から S D016、018、020、021は造り替えと考えられる。S D026、027、028は方向が一致しないが、S B005、006の回りに巡らせてあることがいえ、遺物の出土はないが、第II期とした S B005、006と同時期に存在していたことが考えられる。また S D017は全体は検出されていないが、S D022と同様の形状を呈すると思われる。S D029は遺物の出土はないが、SK014と S D030を接続しているものと考えられることから、それらの造構と同時期であろう。また第II期の造構外出土遺物の分布が、これらの溝状造構が集中する地区に偏っていることからも裏付けられよう。S D023に関しては出土遺物もなく、S D022を切っていることから一応第II期としているが、それ以降に構築された可能性もある。

土坑は、全部で14基検出されたが、その形態にはあまり大差はなく、SK002、004の底部が若干弧を描くように碗状を呈している他は、ほぼ平坦な底部を有している。遺物が出土しているのは SK003~005、007、008、012である。第I期に所属すると考えられる土坑は、山茶碗を出土している SK001、003、004である。第II期の遺物を出土している土坑は SK005、007、008、012であり、他に第II期に属すると考えられる土坑は、覆土の状態、溝状造構を切って掘り込まれている SK009~011、S D029と接している SK013、014である。ただし、厳密には第II期以降に掘り込まれた可能性もあるだろうが、溝状造構の位置とよく一致していることからも、あまり時期差はないと思われる所以、ここでは第II期に含めておく。尚、SK002、006に関しては、遺物の出土がなく、また単独であるため、時期について明確にはいえないが、覆土の状態から第I期に所属すると思われる。

C-11、12区を中心とするピット群からは、主に山茶碗、かわらけの小片が出土している。また造構外出土の中世遺物の分布の集中地点とよく一致していることから、これらのピット群及び周辺に散在するピットは第I期に位置付けられると考えられる。

糸縄遺跡は、第I期が12世紀後半から13世紀前半で、この第I期に所属する造構は、S D001~011、013~015、SK001~004、006、C-11、12区に集中するピット群である。しかし、この

ピット群は掘立柱建物址として把握できるものではなく、集落として鮮明にすることはできない。溝状造構は、このピット群を挟む形で掘り込まれていることから建物を区画するものと思われる。

第II期として16世紀後半から17世紀前半であるが、この第II期に所属する造構はS B001~006、S D012、016~030、S K005、007~014である。S B001~004からは瀬戸・美濃産の皿等が出土しており、また建物の主軸もほぼ一致する。これらの掘立柱建物址を区画する溝状造構は認められない。S D012がS B002の南側を走っているが、逆方向に屈曲しているため、これらの掘立柱建物址を区画しているものとはいい難い。それに対して、S B005、006は、まずS D026、027、028によってそれぞれ区画され、さらにその外側をS D022と030によって区画されている。S D029は、S K013、014とS D030を接続しているものと考えられ、S K013、014に伴う排水路としての機能を考えられる。またS D022との位置関係からS K012は同時に存在していたことがいえる。S K012をはじめ、これらは一応土坑としたが、井戸址としての可能性が高い。土坑は前述したとおり、溝状造構とよく一致しており、断面図からは土坑の方が新しいと判断できるが、何らかの位置関係があると思われる。

S B001~004周辺とS B005、006周辺では、異なる様相を呈しており、これは階層的な差異によるものというより、機能的な差異に起因すると思われる。

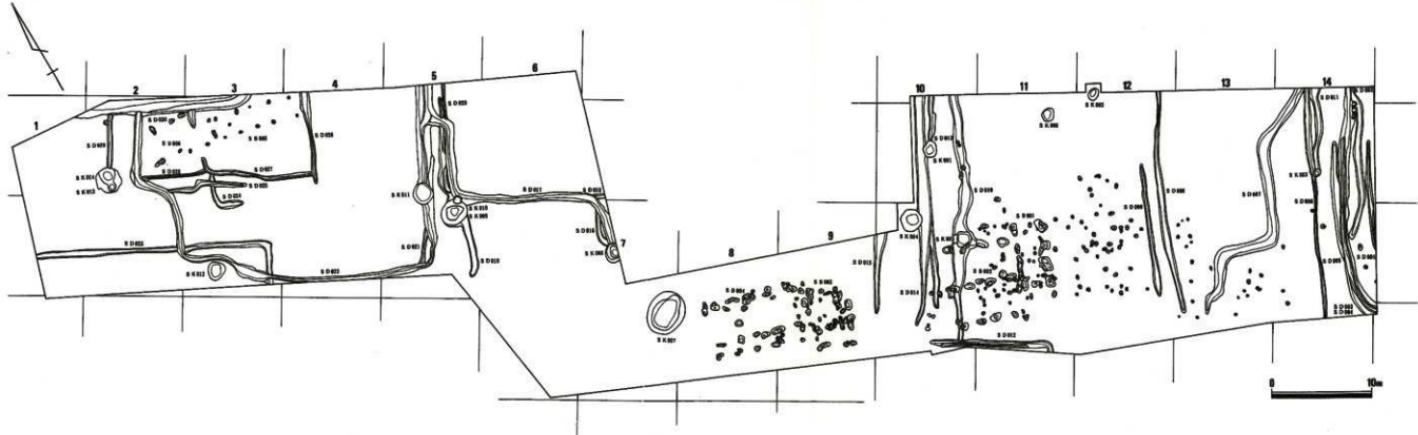
#### 引用・参考文献

- 浅羽町教育委員会 1987『権現山遺跡』  
足立順司 1985「東海地方東部地域の中世陶器・土器」「中近世土器の基礎研究」  
足立順司 1988「歴史に見る県下の窯II（近世～現代）」「静岡の文化」第12号  
井上喜久男 1985「16世紀の瀬戸・美濃窯」「中近世土器の基礎研究」  
磐田市文化財保存顕彰会 1986『玉越遺跡』  
小笠町教育委員会 1985『二ノ谷古窯跡』  
神奈川県立埋蔵文化財センター 1986『千葉地東遺跡』  
建設省中部地方建設局  
静岡県教育委員会 1985『坂尻遺跡』—平安時代・中世編—  
袋井市教育委員会  
後藤健一 1987「渥美・湖西中世窯跡群」「マージナル」No.7  
田口昭二 1983 「美濃焼」 ニュー・サイエンス社  
万国貨幣研究会 1957『新寛永銭鑑識と手引』

八王子市教育委員会 1988 「八王子城跡Ⅹ」

袋井市教育委員会 1985 「土橋遺跡」

向坂綱二 1988 「歴史に見る県下の窯Ⅰ（古代～中世）」『静岡の文化』第12号



第35図 糸継道路全測図

## 付 編

### 大東町糸繰遺跡の地学的立地環境について

加 藤 芳 朗 (静岡大学名誉教授)

#### 1. 町内の地質・地形概説

本町の地形は丘陵・段丘・平地に分けられる。第36図にその概要を示した。

##### (1) 丘陵

本町の約3分の2の面積を占める。風吹トンネル、高天神、大浜公園を結ぶ線をおよその境として西側は礫層丘陵、東側は砂・泥層丘陵である。ただし東部、千浜地区の南山丘陵は礫層丘陵である。

a) 磨層丘陵 本町の西縁と東端にあり、更新世中部の小笠層群の礫層からなる。小笠丘陵の東～東南方延長に当たる。尾根の高さは北西端の無線中継所付近の標高260m余を最高点とし、260-100mにわたる。小笠神社付近の奇勝や史跡高天神城もこの丘陵の一角を占める。風吹トンネル東、高天神付近は半固結の礫岩状を呈するが、その他は粗しきうな未固結礫からなるので丘陵内の雨食による崩壊、礫の押出しがいちじるしい。

b) 砂・泥層丘陵 更新世下部の曾我・掛川層群の砂・泥層を主とし、凝灰岩層を副として含む。標高100m以下の低平な丘陵である。

##### (2) 段丘

かっての平坦な河成平地が隆起した結果、周囲を削られて表面が平坦な段(台)状地形を段丘といふ。菊川筋では中・上流に典型的な段丘群がみられるが、本町内ではごく局部的にしか存在しない。東部の岩滑地区の菊川べり、盛岩院のある段丘と上土方地区に2カ所、小規模な段丘があるにすぎない。いずれも更新世の再末期の形成である。

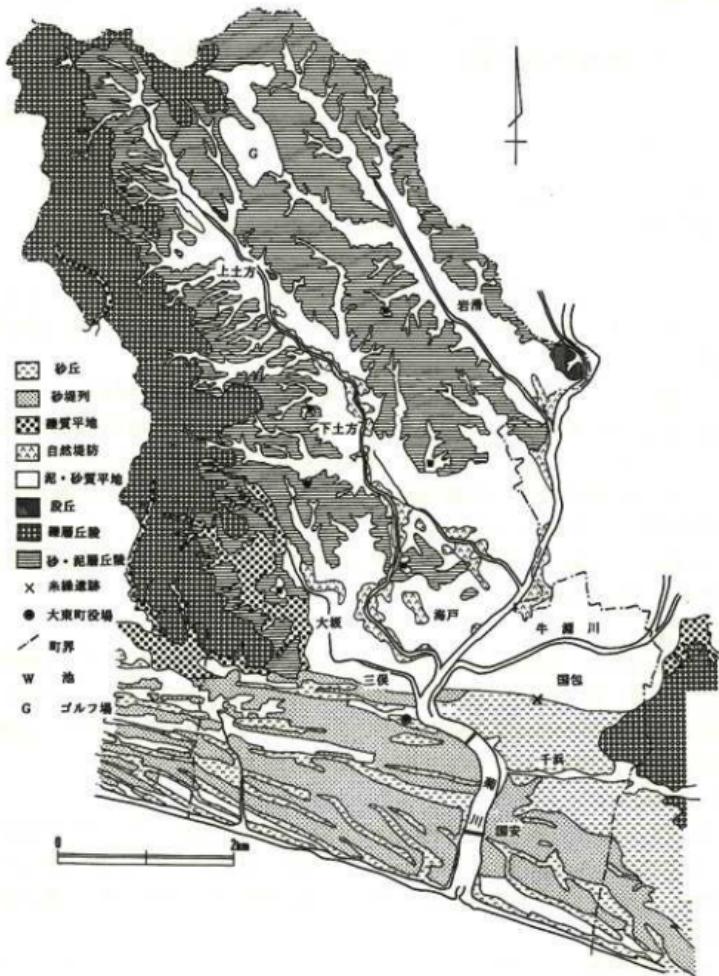
##### (3) 平地

a) 河成平地 菊川とその支流の牛淵、佐東、下小笠の諸河川ぞいの平地に分かれ。

i) 菊川平地 菊川の最下流部にあたる。自然堤防はあまり発達せず、広い後背湿地または潟湖(ラグーン)跡平地よりなり、粘土質～泥炭質の地質である。西ヶ崎付近に蛇行跡が認められる。

ii) 牛淵川平地 牧の原台地に源を発して流下し、菊川左岸のラグーン跡平地に入ってからは蛇行を繰り返すが、ほとんど自然堤防がない。

iii) 佐東川平地 佐東地区の砂・泥層丘陵内からの小規模河川のため運搬物が少なく、下



第36図 大東町の地形・地質図（地形は国土地理院、1982を簡略化）

流部は菊川右岸のラグーン跡平地のままである。

iv) 下小笠川平地 活発な土砂の搬出・堆積という点で上記3河川とは性格を異にする。その理由は流域右岸側にある礫層丘陵の存在である。崩れやすい非固結の礫からなるため、それらが土砂となって押出して川床や平地面を高め、勾配を急にしている。例えば、上土方落合付近の平地の標高は43m、その下の左岸側支流にある城東中学校付近の平地の標高は33mであるのに、分水嶺ひとつ隔てた東隣の佐東川平地、佐東小学校（井崎）付近の標高は14mしかない。また、上土方、下土方、大坂地区には、丘陵内の谷が分水嶺以上の高さにまで埋められて、隣の谷の平地となつがってしまい、それより下流側の分水嶺をなす丘陵が平地の中に孤立する例がいくつもある。第36図では右岸側の支流のうちとくに礫の堆積の甚だしいものを礫質平地として示してある。

v) 矶層丘陵の山麓小扇状地 小笠山の南麓や南山丘陵の北麓には丘陵内から流出する小河川がつくった小扇状地が発達する。本町内では大浜公園南に小面積分布するにとどまる。なお、千浜東から浜岡町合戸にかけて高松川の小扇状地が砂丘の下に伏在するらしいことが、等高線の配列から推定される。

#### b) 沿海平地

i) 砂（浜）堤列 海岸線に平行に幾列もの低い砂質の微高地が並走するのでこう呼ぶ。当然、それらの間には低地（堤列間低地）がある。波の作用でできたため砂丘の砂よりも粗粒なことが多い。内側から順次形成されると考えられている。本町内では砂丘に覆われて砂堤列は部分的にしか確認されない。西部の浜野新田周辺に認められる砂堤列は、西隣の大須賀町地内に見事に発達する砂堤列（少なくとも5列）の東方延長に当たる。また大東町役場北側に一番内陸の砂堤列が存在する。

ii) 砂丘 風で飛ばされた砂がたまってできたものが砂丘である。砂丘の発達が弱いと、砂堤列上に小規模の砂丘がのる程度であるが、発達が強くなると、砂堤列全体を覆いつくし、さらに、風下側の台地、丘陵の上まで押し寄せる。大須賀町から本町西部までが前者、本町中東部から浜岡町にかけてが後者の例である。

国道150号線バイパス以北では砂丘が砂堤列の伸び（海岸線）に平行するが、同以南では海岸線に対し20°~30°の角度で斜めに走るのが目立つ。これを斜砂丘と呼ぶが、明治年代に人工的に造成されたという。それ以前は風向き（西風）に直角に波浪状砂丘が発達し、櫛の歯に似た平面形を呈していたことが明治時代前半の地形図に示されている。

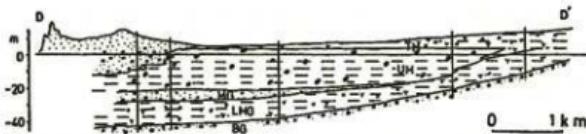
#### (4) 形成の歴史と年代

a) 丘陵 構成地質の年代は前述のように更新世前・中期（200万年前～数10万年前）である。砂・泥層丘陵の掛川・曾我層群は、含有する貝化石から、菊川中～下流域一帯に展開し

ていた海域の深さ100mにも達する海底に堆積したものである。礫層丘陵の小笠層群の礫層は古大井川が南西方に流路をのばして砾を搬入しこの海を埋めて行ったときの堆積物である。その後、地盤は隆起に転じて海底は陸化し、川の浸食で丘陵地形を呈するようになった。

b) 段丘 丘陵内の平地が川の浸食で流路にそって削りこまれて谷ができる、残りの部分が段状の地形をなすのが段丘である。その年代は大ざっぱにいって数万年前ごろであろう。

c) 平地 上記の丘陵・段丘に比べると、平地の年代は急に若くなる。約6000年前（縄文前期）ころ、それまで上昇を続けていた海平面の高さが極大に達した（現在の海面より數m高い位置）。これを縄文海進といふ。その後海面は小変動を伴いながら現在の高さに落着いた。縄文海進時には海岸近くの谷に海が侵入し入江ができた。本町の諸河川も例外ではない。その後入江は背後の川の搬入する土砂によって次第に埋め立てられて現状の平地が形成された。従つて、平地の年代は6000年前より新しいことになる。



第37図 小笠町上平川付近から下流の菊川平野の地下地質（鹿島ら、1985による）

TM：最上部泥層（泥炭質）、UM：上部泥層（貝殻まじり）、

MG：中部砂疊層、LMG：下部砂疊泥互層、BG：基底疊層

このあたりの事情を、鹿島ら（1985）の研究によってみてみる。入江ができた証拠は各河川の平地の下に貝殻まじりの泥層として残っている（第37図）。菊川平地ではこの泥層が小笠町下平川付近まで分布し、入江がこのあたりまで進入していたことが分かる。また、本町の西ヶ崎地先の菊川川床（標高約3.5m）にマガキを中心とする貝層が露出し、その貝殻が放射性炭素による年代測定によって6100～6800年前のものであることが判明している。したがって約6000年余り前に入江の水面が3.5mか少し高い位置にあったことを示している。ところが、大阪地区の砂堤列の砂層（標高6.2m）の上に厚さ0.9mの泥炭層が堆積している。この層の基底部での放射性炭素の年代測定値は約3400年前（縄文後期）である。このことから、この年代には、すでに最も内陸側の砂堤列が存在していたこと、その内側は淡水の湿地（ヨシ原野）となっていたことが指摘される。第37図によると、海岸よりの砂層（砂堤列をつくる）が泥層の上に堆積し、入江の出口を塞ぐような形になっている。したがって、入江の淡水化はこの砂堤列の砂層の堆積によって行われたものと推定される。

では、この砂はどこからきたのか？それは小笠山、南山両丘陵の南裾が海の波に浸食されて

生じた海流により移動してきたものである。両丘陵の南端の東西方向の直線状の急崖は海食崖である。

## 2. 遺跡の立地

本遺跡は最も内側の砂堤列を覆う砂丘上の黒土層の中に形成されている。

### (1) 砂堤列

遺跡では確認することができなかったが、第36図のごとく、西方の菊川東側から同西側の三俣、大坂方面にかけて、最も内側の砂堤列が認められるから、その東方延長の本遺跡の砂丘下に埋没しているものと思われる。この砂堤列の生成年代は前項により、マガキの年代、6100年前から泥炭層基底の年代、3400年前の間である。さらに外側の砂堤列（菊川の西側で明瞭である）も東方に延長して本遺跡の南方の千浜地区で、高松川のすぐ北を走るであろう。

### (2) 砂丘

遺跡の南にそびえる砂丘（標高10.77m）は北にむかって高度を下げ、遺跡の基盤をなすようになる。これは上記砂堤列を覆うのでそれより新しいことは確実であるが、くわしい年代は不明である。

### (3) 砂丘上の黒土層

砂丘の中腹以下には黒土層が発達する。その色は、マンセル方式で10Y R2/1~1.7/1と極めて黒色味が強い。これが砂丘とともに北へ下がり、本遺跡ではIII、IV層となり遺物（平安～鎌倉期、11～12世紀）を包含するようになる。本層は砂壤土の土性と30～40cmの厚さを有する。これだけの土層（腐植層）の形成には少なくとも数百年以上を要する。同時代の遺構がIV層（黒色）を切り、III層（黒褐色）に覆われているという。最も黒味の強いIV層はすでにその時期にできていたことになる。したがって、黒色層の生成開始は少なくとも古墳時代にまでさかのぼることは確実だろう。

砂丘の上に土壤（黒色層）が形成されるためには、砂の移動が停止し長年にわたって砂丘表面が植物に覆われ（砂丘の固定化）、有機物の供給を受け、砂が風化されるのに十分な時間が必要である。このような観点からすると、砂丘の固定化は海岸線が沖合に後退し（海退）、塩分や強風の影響が弱まって植物繁茂に有利な条件がととのった時期に起こると解釈される。（藤、1969）。日本全国の砂丘の黒色層（黒砂層ともいう）の生成時期は、含有する考古学的遺物から縄文中期から後・晩期～古墳初期にわたり、これはまさに、他の事実（埋積浅谷の産状）から推定された海退期と一致するという（井関、1983）。この説に従えば、本遺跡の黒土層もこの時期に形成されたことになる。しかし、本県ではこの種の、砂丘と関連した黒土層の産出は本地域にしかない（筆者は浜岡ゴルフ場北、御前崎町白羽地区でも実見した）こと、上記説の根拠になっ

た地域が日本海側にかたよっていること、形成時期があまりにも長すぎること（2000年余）などから断言は差控えたい。

#### （4）隣接地域の例

a) 浅羽町南部 ここも何列かの砂堤列が発達する。その最も内側の第Ⅰ砂堤列（松山）で縄文後～晩期の土器が採集され、さらに南側の第Ⅳ砂堤列（松原、権現山遺跡）から弥生中～後期と思われる周溝墓が発掘されている（柴田、1987）。

b) 大須賀町山崎 浅羽の第Ⅰ砂堤列の続きと思われる石津の砂嘴の内側にあたる山崎地区の泥炭地の地表下2.2mでの放射性炭素の年代が約2980年前である（鶴見他、1983）。

c) 棚原町静波 最も内側の砂堤列背後のラグーン跡平地の淡水成地層（海拔-1.7m以浅）中の泥炭層の放射性炭素同位元素年代が約3320年前である（鶴見他、1983）。

これらから、各地とも最も内側の砂堤列の成立（ラグーン跡の淡水化）が少なくとも約3000年前（縄文後晩期）であったことが分かる。これは本遺跡の事情とよく一致している。

d) 浜松市～雄踏町 ここも数列の砂堤列があり、泥炭層の放射性炭素同位元素年代が測定されている。伊場遺跡周辺では、可美村高塚地区の第3砂堤列（旧国道1号線が走る）の南北両側の堤列間低地で、それぞれ、約1830年前、約3090年前の値が（鶴見他、1983）、伊場遺跡北端（第2砂堤列の北の堤列間低地）で約4100年前の値が（泥炭層の最上位。加藤、未発表。一部は加藤、1985で紹介）得られている。また、雄踏町宇布見北の第1砂堤列背後のラグーン跡平地の泥炭層下底が約5000年前の値を示す（池谷他、1985）。この地域の砂堤列形成の始まりは本遺跡付近よりもかなり古い。

### 3. 遺跡砂層の粒径分析

#### （1）試料

遺跡内の砂層の堆積環境（砂丘）を確認する意味で、表1のごとき試料について粒径分析を行った。この中には、対象試料として、本町役場の真南の浜川新田および海岸と汀線の砂（No.s.9-11）が含まれている。

#### （2）分析方法

日陰で風乾した試料25g前後を正確に秤量し、1-0.044mm ( $\phi$  < ファイ> スケールで0-4.5) の篩セット ( $\phi$ スケールで0.5間隔) を用意し、目の粗い篩から順次手作業で砂試料をふるい、篩上の残分を秤量した。 $\phi$ スケールとは、粒径を  $2^{-n}$  mmで表わしたときのべき乗数nで粒径を示す方式である。nとmmとの関係は、n = 0 は  $2^{-0}$  で1mm、n = 2 は  $2^{-2}$  で $\frac{1}{4}$  mmといった具合になる。

表1 試料の一覧と粒径組成の特性

No.	地 点	色 (マンセル)	$\phi_{10}$	$\phi_{50}$	$\phi_{90}$	M( $\phi$ )	$\sigma_0(\phi)$	Sc( $\phi$ )	*
遺 跡 関 係	1 発掘区南の砂丘の採掘現場、灰色砂	7.5YR6/1.5 灰～灰オーリーブ	1.54	1.89	2.23	1.89	0.35	0	DB
	2 同上砂丘の北側斜面、黄色砂	2.5Y5/2 暗灰黄	1.55	1.97	2.33	1.94	0.39	-0.08	DB
	6 試掘A6とA7の間、V層、黄色砂	2.5Y5/2 暗灰黄	1.47	1.95	2.36	1.92	0.45	-0.07	DB
	7 小屋の南、黄色砂	5Y6/2 灰オーリーブ	1.37	1.79	2.14	1.76	0.39	-0.08	DB
対 象	9 浜川新田、斜砂丘 C層、黄色砂	2.5Y5/3 黄褐	1.64	2.03	2.37	2.01	0.37	-0.05	DB
	10 同上、海岸最前線 砂丘、白色砂	7.5Y6.5/1 灰白～白	1.82	2.02	2.23	2.03	0.21	0.05	DB
	11 現汀線(波打際) 白色砂	10Y7/1 灰色	1.28	1.75	2.11	1.70	0.42	-0.12	DB

\* Friedman図の領域の組合せ

## (3) 分析結果の表示と整理

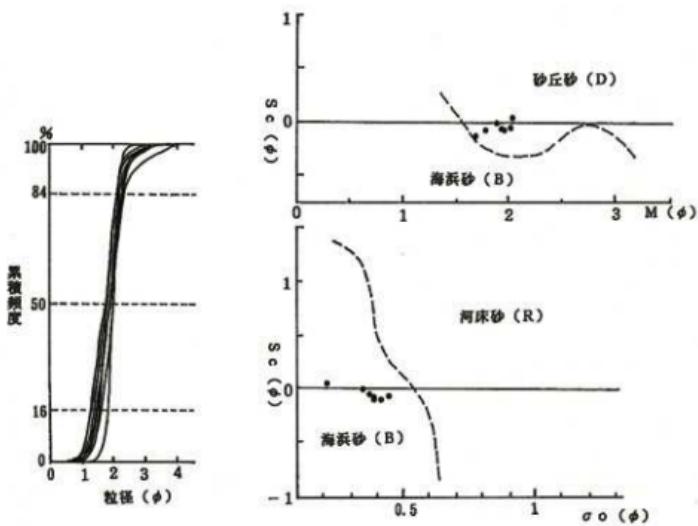
各箇残分の重量の試料総重量に対する百分率(頻度%)を粗粒側から順次加算した累積頻度%と粒径(φスケール)との関係曲線(累積頻度曲線)を描き累積頻度84、50、16%に対応する曲線上の粒径( $\phi_{10}$ 、 $\phi_{50}$ 、 $\phi_{90}$ )を求める(第37図)。16%は正規分布曲線の標準偏差である。これとともに、下記の簡易式を使って3つの粒径組成パラメーターを計算する(表1)。

$$M_s(\phi) = \frac{\phi_{10} + \phi_{90}}{2} \quad (\text{平均粒径})$$

$$\sigma_0(\phi) = \frac{\phi_{90} - \phi_{10}}{2} \quad (\text{淘汰係数=粒径のそろい方})$$

$$S_c(\phi) = \frac{M(\phi) - \phi_{50}}{\sigma_0(\phi)} \quad (\text{歪度=頻度の極大位置のずれ*})$$

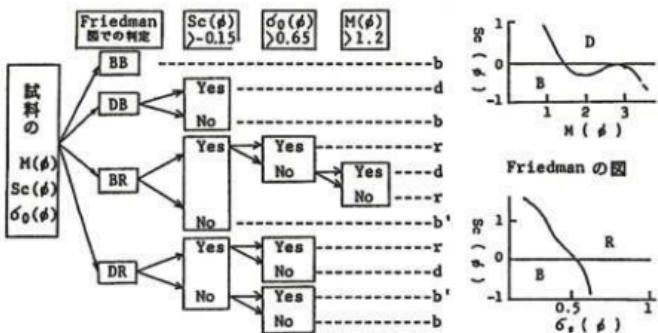
\*  $\phi$ の小さい(粗粒な)方に極大が偏ると+符号、その逆が-符号



第38図 累積頻度曲線（左）とFriedmanの領域図へのプロット（右）

#### (4) 試料の堆積環境の判定

上記の3つのパラメーターを使って、Friedman (1961) の海浜砂、砂丘砂、河床砂の領域図（第38図左）にプロットする。上、下の領域図のどこに入るかを組み合わせて、その順に、英大文字の略号を並べる（例えば、DR、BBのように）。その結果は表1の右端のごとくで、全試料がDBである。これとパラメーターの値を、筆者の作製した検索試案（第39図）に適用すると、全試料とも d（砂丘砂）と判定される。対照の砂丘砂試料がすべてそうであるのは検索試案が妥当であることを示唆する。従って、遺跡内の砂も砂丘砂と考えて間違いかろう。ただ、対照のNo.11（海浜砂）がdと判定された点だけが問題として残る。第38図右の領域図（上）で海浜一砂丘砂の境界線に最も近いプロット [ $M(\phi)$  が最小] がNo.11である。 $S_c(\phi)$  は計算の過程で誤差が大きいことを考えると、このプロットはB領域に入ることもありうるであろう。そうだとすれば、この試料はDBではなくてBBとなり、検索試案で b（海浜砂）と判定されることになる。この点は今後検討を重ねて修正してゆきたい。



第39図 砂の堆積環境判定の検索試案（市原ら、1984、P 658～660）

#### 引用文献

- Friedman, G.M. (1961) Distinction between dune, beach, and riversands from their textural characteristics. *J. Sed. Petr.* Vol. 31, p. 514-529.
- 藤 則雄 (1969) 日本海沿岸の海岸砂丘。金沢大日本海城研究所報告、1号、5-33頁。
- 市原寿文・井関弘太郎・加藤芳朗他7名 (1984) 繩文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性に関する研究。「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学一総括報告書一」、657-672頁、文部省科研費特定研究「古文化財」総括班。
- 池谷仙之・大浦 裕・阿久津 浩・和田秀樹 (1985) 浜名湖東岸完新統の層序・層相とその年代。静大地球科学研究報告、11号、171-179頁。
- 井関弘太郎 (1983) 「沖積平野」。東大出版会。
- 鹿島 薫・長沢良太・宮崎 隆 (1985) 静岡県菊川平野における完新世の海水準変動に関する資料。第四紀研究、24巻、45-50頁。
- 加藤芳朗 (1977) 伊場遺跡をめぐる自然環境の地学的検討。「伊場遺跡遺構編」、150-155頁、浜松市教育委員会。
- 加藤芳朗 (1985) 坂尻遺跡をめぐる地形・地質学的背景。「坂尻遺跡—自然科学編一」、1-12頁、袋井市教育委員会。
- 国土地理院 (1982) 1/25,000土地条件図「掛川」、「住吉・御前崎」。
- 柴田 稔 (1987) 周辺の環境・遺跡の概要。「権現山遺跡」、5-58頁、浅羽町教育委員会。
- 鶴見英策他5名 (1983) 南関東・東海地域広域変動地形調査、11-12頁、国土地理院。

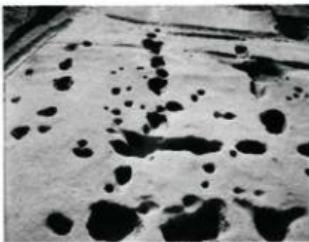


# PLATES

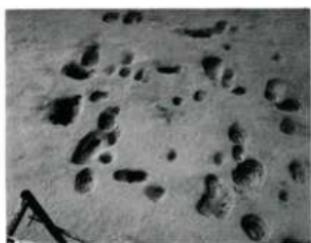




1. S B 001



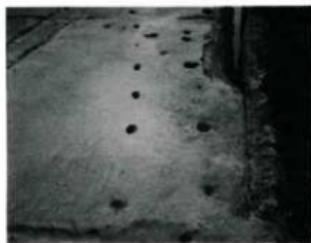
2. S B 002



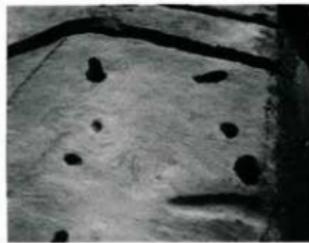
3. S B 003



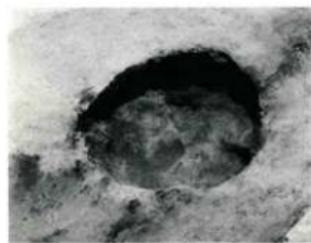
4. S B 004



5. S B 005



6. S B 006

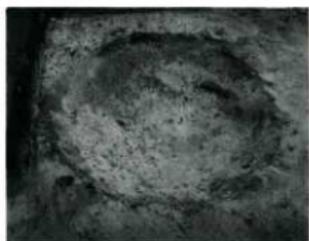


7. S K 001

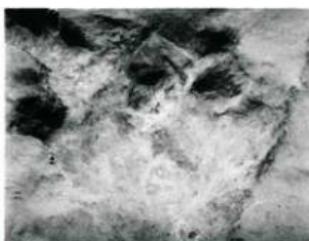


8. S K 002

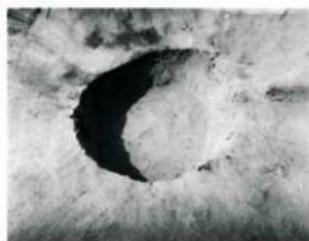
P L . 2



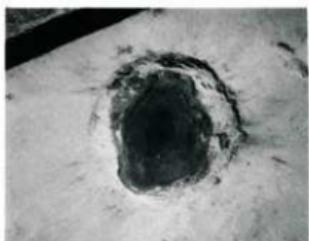
1. S K004



2. S K005



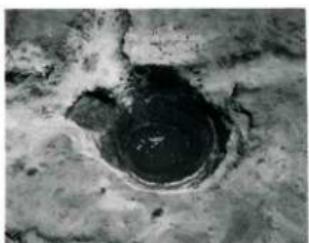
3. S K006



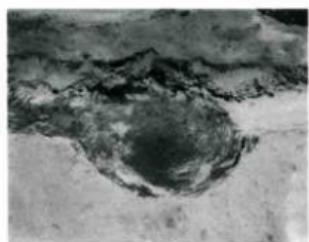
4. S K007



5. S K008-S D016-017



6. S K009-010

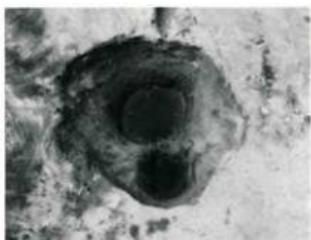


7. S K011



8. S K012

P L . 3



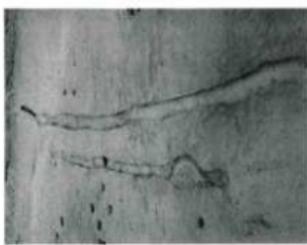
1. S K013-014



2. S D001-006-011



3. S D007



4. S D008-S D009



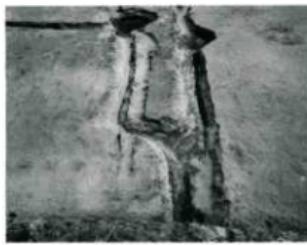
5. S D010-S D013-015



6. S D012



7. S D017-019-020



8. S D017-S D019-022

P L . 4



1. S D017



2. S D002-023·S K012



3. S D023



4. S D022-029·S K013-014



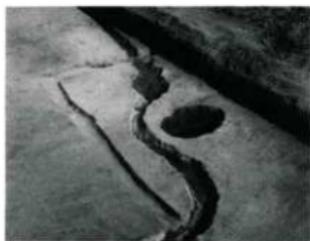
5. S D030



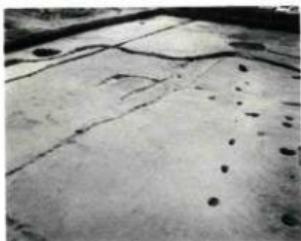
6. C-12区ビット群



7. S B006·S D022



8. S D022-023·S K012



1. S B 005-006・S D 024~028



2. 調査状況



3. 調査状況



4. 調査状況



5. 条線遺跡航空写真



5. 条線遺跡航空写真

P L . 6



S B 001- 1



S B 002- 2



S B 002- 2



S D 002- 3



S D 008- 9



S D 010- 10



S D 010- 11



S D 010- 12



S D 012- 13



S D 014- 15

S D 014- 14



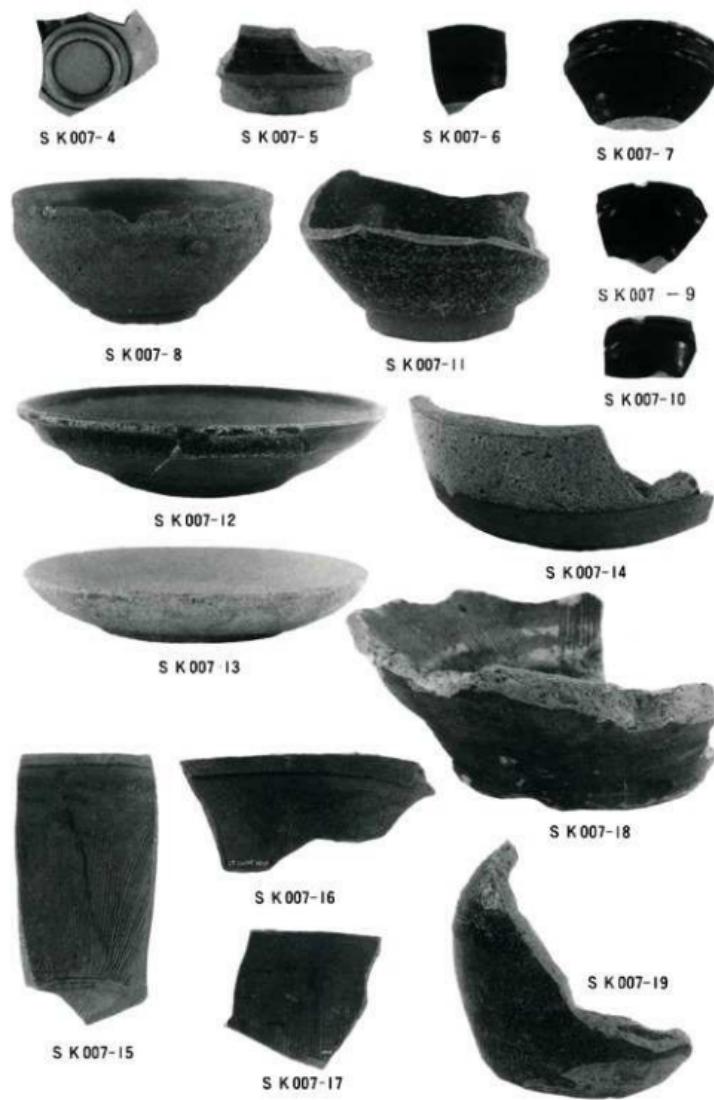
S K 004 2



S K 003- 1

S B · S D · S K 出土遺物

P L . 7



S K 007 出土遺物 (1)

P L . 8



S K 007-20



S K 007-21



S K 007-22



S K 007-23



S K 007出土遺物 (2)



1



2



3



7



4



5



6



8



9

繩文～古墳時代出土遺物



1



56



57



59



81



82



83



84



85



87



88



91

遺構外出土遺物 (I)



92



97



98



99



100



101



102

遺構外出土遺物 (2)

糸 織 遺 跡

発 行 日 平成 2 年 3 月 31 日

発 行 大東町教育委員会

編 集 中山俊之・柏谷 崇

印 刷 中部印刷株

☎ (0534) 41-2431

---





